

長谷川端蔵

『源氏物語』

大鳥居信岩筆

「須磨」

岡本主水筆

「明石」

「漫標」

長谷川

端（文責）

駒

田

貴

子

村

井

俊

司

解題

一、書誌

ここに翻刻するのは、長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』、『源氏物語秘訣』〔各一冊の中の筑前宰府大鳥居信岩筆「須磨」、岡本主水筆「明石」「漚標」である。

「須磨」は、綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に金泥にて水紋と波に漂う藻を描き、その藻に金で花を付した下絵に、「すま」と墨書きする。全丁数は四十三丁、墨付四十一丁、遊紙前後各二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文が続いている。字数は三丁二十八字、字高は十九糎。最終丁の末に「一更了」と記す。奥書、識語はない。

「明石」は、綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に金銀泥にて草木を描き、女郎花の花に銀を施した下絵に、「あかし」と墨書きする。全丁数は四十九丁、墨付四十五丁、遊紙前後各二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文が続いている。字数は四丁二十五字、字高は十九糎。最終丁の末に「一更了」と記す。奥書、識語はない。

「漚標」は、綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子で

ある。題簽は、中央上部に金銀泥にて海岸の景を描き、松は朱、砂と波は銀の彩色を施し、「みをつくし」と墨書きする。全丁数は四十丁、墨付三十九丁、遊紙は前のみ一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は二丁二十三字、字高は十九糎。最終丁の末に「一更了」と記す。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺」⁽³⁾、玄陳筆「帚木」⁽⁴⁾、玄的筆「空蟬」⁽⁵⁾、岡本主水筆「夕顔」⁽⁶⁾、「若紫」⁽⁷⁾、「賢木」⁽⁸⁾、石井了俱筆「未摘花」⁽⁹⁾、西山宗因筆「紅葉賀」⁽¹⁰⁾、「宿木」⁽¹¹⁾、左馬助筆「花宴」⁽¹²⁾、東寺観智院筆「葵」⁽¹³⁾、北左平次行生「花散里」⁽¹⁴⁾は、既に解題を付し翻刻した。

二、大鳥居信岩の書写

「須磨」の書写者大鳥居信岩は、太宰府天満宮の別当である。大鳥居氏については、天満宮のある筑前国福岡藩の黒田家に仕えた儒学者、博物学者の貝原益軒（篤信）が記した『太宰府天満宮故実』⁽¹⁵⁾巻之下に、

後堀川院の御時、菅公九世の孫、菅原善昇といひし人、おほやけのみことのにて西府に下り、社職を勤め、祭祀を司れり。後に祝髪して信貞と号す。その嫡子を信昇と云。是より、大鳥居、小鳥居杯の家分れて、其子孫相続で、今に至て社務職たり。

とあるように、菅原道真の後裔で、別当職を世襲する家である。大鳥居氏の呼称については、これも貝原益軒の『筑前国続風土記』⁽¹⁶⁾「御笠郡 中 天満宮」に、

大鳥居の向に宅ある故、其家为大鳥居と云。小鳥居の方に宅ある故、其家の名をも小鳥居といふ。

という説明がある。また、同書には、「大鳥居はいにしへより別当留守職として、今も其巨擘たり。」とあり、大鳥居氏が「其巨擘たり」、つまり神職の長、総括であるとも記す。

その大鳥居氏の歴代別当の伝記を記した『司務別当大鳥居家々略譜』⁽¹⁷⁾には、信岩について、

信岩 元龜三壬申歳生、天正十六子年家督、十七歳、寛永五戊辰年退身、五十二歳、水田住ス、同十五戊寅年、息信助依病辞司務職、此時信助息漸ク十歳、未遂刺髪、依之信岩再職、在水田兼勤太宰府司務職、

寛永廿年癸未、孫信兼工讓職、再隠居、

正保四丁亥歳正月晦日卒、七十六歳（信兼筆記二八七十二トアリ）、法印任叙、

妻 柳川城主立花飛彈守宗茂娘、水田庄二住ス、

側室 秋月家老宮崎織部娘、宰府二住ス、

天正年中、太閤秀吉公九州御下向之節、肥後国南之関工罷出、奉謁、上京出府等ノ事、黒田如水公・長政公ヨリ被仰聞諸事、御直書等数通有之、

と記されている。これによって生涯は、元龜三年（一五七二）から正保四年（一六四七）とわかる。太宰府天満宮の別当、水田天神の神職として豊臣秀吉から徳川家光の時代を生きた人物である。水田天神は現在筑後市にあり、その水田に大鳥居氏は莊園を持っていた。⁽¹⁸⁾ この『司務別当大鳥居家々略譜』にも「妻」の部分に「水田庄二住ス」とある。棚町知彌氏⁽¹⁹⁾によれば、信岩も天正後半から慶長初期には、この筑後水田を生活の本拠としていたという。

ここに引用した『司務別当大鳥居家々略譜』と、自筆⁽²⁰⁾と推定される写本が残る信岩半生の自叙伝『一生年記』⁽²¹⁾

等を基とした、棚町氏の信岩³²⁾の伝記に関する考証を参考にして、信岩の生涯を年譜にすれば次のようになる。後述する本書の書写状況を考えるために、里村家の人々の関連記事等も加えておいた。

年号	歳	記事
元龜 三年 (一五七二)	1	出生。
天正 二年 (一五七四)	3	昌琢出生。
十六年 (一五八八)	17	父より別当職を譲られる。
二十年 (一五九二)	21	朝鮮出兵のため名護屋へ下向した豊臣秀吉と面会する。紹巴へ付句。
文祿 四年 (一五九五)	24	父信寛上洛。紹巴へ付句。
慶長 三年 (一五九八)	27	豊臣秀吉没。
五年 (一六〇〇)	29	父信寛没 (四十八歳)。如水からの最初の書状。社領安堵のため京都に行く。如水、長政、筑前に入国。如水は福岡城落成まで天満宮近くに住み、連歌等で交流。
六年 (一六〇二)	30	里村一門との連歌会。
七年 (一六〇二)	31	紹巴没。如水、天満宮の神殿を再興、社領を献上する。
八年 (一六〇三)	32	昌叱没。
九年 (一六〇四)	33	子息信助、出生。如水没。
十二年 (一六〇七)	36	玄仍没。
元和 七年 (一六二一)	50	嗣子信助の里村家留学に関する書状。江戸に行く。

九年（一六二三）	52	長政没。
寛永 五年（一六二八）	57	子息信助（二十五歳）に職を譲る。石井了俱没。
十五年（一六三八）	67	子息信助病により職に復帰する。
二十年（一六四三）	72	信兼（信助の養子）に職を譲る。
正保 四年（一六四七）	76	信岩没。

この年譜の中で、信岩が「須磨」を書写した基盤となる里村家との関係については、信岩の息信助の里村家遊学に関する次の書状から、棚町氏に「紹巴・昌叱らと信岩とを近くした如水の介在が考えられるのである。」という指摘がある。

信助老御上洛二付尊書忝存候 如仰今度始而御在京 無御心元思召候事御尤二存候 昌琢二て儀万事御氣遣
被成間敷候 少も如在二不在候 昌琢へも内々可然様二申入候 今度 長政様大徳寺二て昌琢昌侃へ御懇
二被仰渡候 兩人共二別義御座有間敷との御事二候も 其次斗二北野徳勝院と之儀 万事昌琢御見及次第二
可然儀と其御才覚候へとのみ二候 無存所も御懇二被仰渡候 可御心安候（表）
信岩儀は大名二ては候へとすりきり候て御座候 万事我等地走斗二て在京有之よし 長政様被仰候 内々
二て昌琢拙者二御尋候間能様二申入候も 我等事三月廿三日二東福寺迄参候 昌琢も今日は日なみ悪敷候間
廿四日二御出候へと被仰候間 明日昌程八同道可仕と存候 何様重而可申入候 恐惶謹言
三月廿三日 昌（花押）（裏）

棚町氏によれば、この書状は、里村南家の連歌師の昌林から、信岩宛てといわれ、裏面の「信岩儀は大名二ては候へ」という部分は、信岩の社会的位置を考える上で看過できない言葉である。

信岩は大名のような存在であるが、「すりきり候て」持合せがなく、京都の滞在費は黒田家が賄ったというのである。同じ筑前で同時代を生きた島井宗室などは、豪商という財力によって「大名のごとく」と称せられるが、長政が信岩を「大名ニては候へ」と言ったのは、先に見た益軒の『太宰府天満宮故実』、『筑前国続風土記』に記されていた、大鳥居氏の伝統ある家系を指すのである。

時代は少し下るが元禄時代に出版された『人国伝』⁽²⁶⁾「筑前」に、

古昔八太宰府とて 九国の官領の官府ありて 是を西都ともいひし

と記すように、筑前における太宰府は特筆すべき存在であった。その太宰府と関連の深い太宰府天満宮も、歴史と伝統に裏打ちされた厳然たる存在であり、大鳥居氏は、その別当職として、武士の世にあって、今川、大内、そして小早川から黒田へと移り変わる領主と違い、天満宮と共に脈脈と続いてきた氏といえる。それを領主、黒田長政も認め「大名」という言葉になったのである。

この「大名ニては候へ」という天満宮別当としての信岩の地位が、「須磨」の書写を信岩に依頼する契機となったのは、いうまでもない。「大名ニては候へ」という信岩の書写への参画は、この『源氏物語』揃の価値を高めるからである。

信岩が別当職にあった天満宮については、周知のように、天神を連歌の神とする信仰がある。その起源について、金子金治郎氏⁽²⁷⁾、伊地知鐵男氏の論考を踏襲して、島津忠夫氏⁽²⁸⁾は、

北野の神、菅原道真は、(中略)文学の神でもあり、特に靈驗あらたかな神であるという信仰の上に、足利家と北野社との関係などの現実的な要因も重なりあって、この『菟玖波集』の成立の時点で、連歌の神としての北野天神が出現する。

と説明する。「『菟玖波集』の成立の時点」とは、二条良基が撰した文和五年（一一三六）を指し、足利尊氏が活躍した室町時代の初期である。そして、太宰府天満宮も金子氏が⁽³⁰⁾、

太宰府安楽寺の菅公廟は、北野信仰の根源であつたから、太宰府天神と連歌との結合も、北野に並んで行なわれたらうと思われる。

というように、北野同様、連歌の神と崇められ、救済や周阿、宗祇といった連歌師が訪れている。

その太宰府天満宮において連歌は、島津氏が「連歌御祈禱は、重要な神事の中核にあつた。」というように、信仰と一体化して重きを増していた。永禄二年（一五五九）の文書にある大鳥居家の嫡子、つまり天満宮の別当職の資質の一つとして「連歌専スヘシ」という記載も、連歌が重要視されていた状況をよく示している。

この家訓は、長く別当職にあつた信岩にも継承され、幾つかの連歌活動が見られる。先の年譜に記した、二十歳⁽³¹⁾の文禄二年（一五九三）に、紹巴への付句を始めとして、連歌会にも一座している。「連歌総目録⁽³²⁾」と「太宰府天満宮連歌史⁽³⁴⁾」によると、信岩が連衆となつている連歌会は十三ある。

慶長六年（一六〇二）一月十七日 何人百韻

発句 草に木にいかにくみせぬ梅花

昌叱十二・徳善院僧正（前田玄以）十・円清九・禅高八・玄仍十・昌琢十・長俊八・玄朔七・信岩七・乙

重六・宗色六・宗勺六・実右一

慶長六年（一六〇二）一月二十六日 何船百韻

発句 子日して年やふる木の野への松

紹巴十二・正実一・昌叱十二・生（日野光慶卿）十・玄仍十・昌琢九・玄朔九・信岩七・友益九・正琳七・玄仲六・実右七・能円一

慶長七年（一六〇二）一月十六日 如水公御夢想之連歌百韻

発句 松むめや末なかかれとみとりたつ

御二・円清十一・幸円一・長政一・御上一・松寿丸一・御菊丸一・紹印七・信岩八・古庵八・江青八・真斎九・実右八・正重八・良乗九・清重八・空与八・信生一

寛永七年（一六三〇）十一月 第一百韻 何船

発句 久かたの春しる梅のにほひ哉

忠之朝臣一・太涼院一・孝政一・高政一・御亀一・家中一・信岩十一・良乗十・信禎十・信助十・信朔八・秀賀七・良円五・快珠七・快欽八・好重七・快典五・実運二・氏吉三・氏重一

寛永十三年（一六三六）九月吉日 何人百韻

発句 箱崎や松原あけぬ今朝の月

玄仲十一・忠之朝臣九・紹尚九・永遍七・快周七・信岩八・良眼六・正範七・信助八・利玄九・信禎六・玄悦七・卜祐五・勝重一

寛永十三年（一六三六）九月二十五日 何人百韻

発句 水も色に染河なかつ紅葉かな

玄仲十三・信助八・忠之朝臣一・紹尚十・信岩九・利玄九・玄悦八・信禎九・信重八・好重八・快欽八・良祐八・勝重一

寛永十三年（一六三六）十月 何木百韻

発句 冬かけてなを長きよの時雨かな

忠之朝臣九・紹尚八・玄仲十一・永遍七・信岩八・正範七・信助七・信禎八・玄悦八・利玄七・快欽六・卜祐五・昌以八・勝重一

寛永十七年（一六四〇）八月二十五日 寛永十七年万句の内 第二百韻何路

発句 野を広みあかぬ詠の真萩哉

形俊・快周・信岩・良祐・一灯・快欽・信重・良眼・信禎・正範・昌以

寛永十八年（一六四一）九月二十八日 夢想之連歌

発句 君に千代あゆみをはこふなりけり

御一・忠之朝臣一・信岩十四・快欽十二・信助十三・雄重九・好重五・実運八・氏吉十一・氏重十・助実十・昌三一

寛永十八年（一六四二）十月二十二日～二十四日 御夢想御祝儀之千句 第一

発句 君に千代あゆみをはこふなりけり

御一・忠之朝臣一・信岩十四・昌林十四・信助十一・快欽八・信重八・好重八・信達九・実運七・氏重八・氏孝十・昌三一

寛永二十年（一六四三）五月二十五日 何船

発句 幾夏もいく世久しきなかは哉

忠之朝臣一・信岩十三・快周十・永遍十・一燈十一・良眼八・正範九・形俊九・守三九・善斎八・昌林十一・氏重一

寛永二十年（一六四三）六月吉日 六月千句 第一山何

発句 みとり立松は千年の栄哉

御作代・一灯・信岩・正範・信重・良眼・好重・快欽・昌林・快周・形俊・永遍・守三・善斎・氏吉・重郷・氏重

正保二年（一六四五）三月二十三日～二十五日 初千句目 第一山何

発句 緑たつ松は千とせの栄へ哉

御作代・信岩・快周・一灯・良眼・正範・信重・信禎・形俊・快欽・永遍・信達・実運・好重・信通・重

郷・氏重

は、信岩上京の際の興行で紹巴、昌叱、玄仍、昌琢の里村一族と、如水と前田玄以といった武家との一座である。は、筑前での連歌会である。関ヶ原の戦いの後、長政は筑前に加増、転封となり、如水も入国していた。は長政の嫡子で当時の藩主、忠之の許での興行である。そして、は玄仲が太宰府へ下向した折の一連の連歌会であり、は万句連歌であり、で信岩は「初千句目」のみに一座している。は、藩主忠之も出席した興行で、は同様千句連歌である。

この十三の連歌会は、の信岩が上京した時の連歌会を除くと、全て筑前での興行となる。信岩は二代迄は水田、それ以降は太宰府で生活しており、これまで取り上げた、京都在住の書写者とは違つ。

京都在住の書写者は、当時の連歌界の大宗匠で、この『源氏物語』揃の書写でも中心的役割を果たしている昌琢が出席する連歌会に、連衆となっている場合が多かったが、信岩は九州在住のため、当然、一座の機会もなく、その活動の場は、殆どが筑前での連歌会となるのである。

しかし、里村家とは、父信寛が文禄四年（一五九五）京都で、

文禄四年七月廿一日於紹巴亭 太宰府大鳥居信寛興行

発句 梅か枝や西よりも先初紅葉

紹巴十二・信寛八・昌叱十二・生九・玄仍十・友益八・景敏九・寿恩七・寛実六・紹印六・益彦六・玄仲六・

宗可一

という、紹巴や昌叱、玄仍、玄仲といった里村一族を連衆とする連歌会を催し、信岩も上掲のように、上京の際の里村家の人々との一座があった。また、信岩の子息信助は、棚町氏³⁵が「元和七年三月（十八才）より、す

くなくとも二年弱、京里村家に教えを受けた。」と言つように、京都の里村家で学んでいる。

このように里村家とは、代々切れ目のない繋がりがあつた。そしてその基盤にあるのは、連歌の神は天神であり、太宰府天満宮の別当職で九州在住の連歌の家としての大鳥居氏という位置である。

この連歌の家として看過できない大鳥居氏が、当時の連歌師が分担して書写する『源氏物語』の一巻を担当する意味は大きいといえる。この『源氏物語』揃の書写年代は、寛永の早い時期、寛永四年（一六二七）から六年（二二一九）と考えられた⁽³⁶⁾。寛永五年（二二一八）には、信岩は別当職を二十五歳の子息信助に譲っている。先に見たように、信助は京都の里村家に留学しており、昌琢等にとっては、信岩より近い存在で、書写者に抜擢されても不思議ではない。現に信助は、昌琢や玄陳、宗順、能円、行生、宗因等、この『源氏物語』揃の書写者達⁽³⁷⁾が連衆となつている連歌会にも出座していた。

しかし、先に触れたように、長政から「大名ニては候へ」といわれ、年齢的にも昌琢に近い五十代半ばである信岩の方が、重みがあり箔が付く書写者であるのはいうまでもない。

その信岩は、京都以外、遠隔地に在住する唯一の人物でもあり、この点だけを取り上げても書写者の中では、重要な存在であつたといえる。京都から離れた太宰府在住の信岩に、『源氏物語』では珍しく、京都以外の場所を舞台として物語が進行する『須磨』という、有名な巻を依頼したのも意味があるように思われる。

周知のように『須磨』の巻は、『河海抄』がいう、紫式部が石山寺に参籠して『源氏物語』を書き出した巻として有名である。信岩が連歌会で同座した玄仍の『源氏物語註』⁽³⁸⁾上冊にも、

式部二仰られけれ八石山河海抄に通夜して此事を祈申に折しも八月十五夜の湖水二うつりて心のすミわたるまゝに物語の風情なとかひけるを忘ぬさきにとて仏前二有ける大般若の料紙を本尊二申請て先須磨明石の巻を

書とゝめけり 是によりて須磨の巻二こひ八月十五夜なりけりとおほし出てと八侍るにや

と記されている。この『源氏物語註』は連歌師のための注釈書で専門性が高いが、女庭訓の本などにも式部が湖水を望む部屋で机を前に座る絵と共に、この話を記している本があるように、一般にもよく知られた話である。つまり「須磨」の巻は、この話と共に有名な巻であったといえる。

また、物語の内容としても、光源氏の前半生を綴った第一部にあつて、特徴ある有名な巻が「須磨」であり、分量的にも少なくない。その「須磨」の書写者に信岩をあてたのは、繰り返しになるが、太宰府天満宮の別当として、連歌にも深く携わる重要な存在であり、その信岩の書写への参画は、この『源氏物語』揃の価値をたかめるからである。

三、岡本主水の書写と本文のミセケチ・補入等

「明石」「澁標」の書写者、岡本主水の伝記については、「夕顔」を翻刻³⁹した際に触れたので省略するが、ミセケチ、補入等に着目して、ここに翻刻した「須磨」「明石」「澁標」の三巻におけるその数を調べると次のようになっている。参考のため、以前調査した「桐壺」から「花散里」に「宿木」を加えた表も掲げた。

總計	朱点	合点	傍書	補入	ミセケチ	書写者	卷
235	59	21	6	55	94	岡本主水	賢木
10	4	1	1	2	2	行生	花散里
53	0	0	12	19	22	宗因	宿木

總計	朱点	合点	傍書	補入	ミセケチ	書写者	卷
57	47	1	0	7	2	昌琢	桐壺
2	0	0	2	0	0	玄陳	帚木
1	0	0	0	1	0	玄的	空蟬
253	113	14	2	48	76	岡本主水	夕顔
293	150	14	10	49	70	岡本主水	若紫
3	0	0	1	0	2	了俱	未摘花
116	28	7	4	29	48	宗因	紅葉賀
23	2	10	1	3	7	左馬助	花宴
19	0	3	8	4	4	觀智院	葵

總計	朱点	合点	傍書	補入	ミセケチ	書写者	卷
217	84	55	11	33	34	信岩	須磨
252	99	25	9	40	79	岡本主水	明石
147	64	5	6	17	55	岡本主水	澗標

今回翻刻した「須磨」「明石」「澪標」の三巻について見ると、主水が書写した「明石」「澪標」は、「夕顔」「若紫」などと同じく、ミセケチ、朱点等が多いとわかる。また、信岩の「須磨」も主水同様、ミセケチ、朱点等が多いといえる。全体の総計部分を概観するとわかるように、信岩は、主水に次いで多く、特に、合点の数が群を抜いて多いという特徴がある。

今回翻刻した三巻は、何れも「一更」という記載が最終丁にあり、校正がなされた写本ばかりである。そのため、ミセケチ、朱点等が多いのは、一応、この校正がなされているからだといえる。

これらミセケチ、朱点等についての見解や結論は、やはり、すべての巻の調査の後、または、更に多くの巻の傾向を把握した後にするとして、「若紫」の解題で述べた岡本主水の書写した巻は校正がなされ、ミセケチ等が多いという事実と、信岩の「須磨」も、その数が多いという点を確認し、留意しておきたい。

四、結語

慶長九年（一六〇四）三月二十日、黒田如水は、京都伏見の藩邸において没した。その時の様子を『黒田家譜』⁽¹⁾は、

終に三月二十日辰の刻に身まかり給ふ。如水病中に辞世の歌を詠じ給へり。

おもひおく言の葉なくてつひに行く道はまよはじなるにまかせて

此歌、自短冊に書て名を記し、判取を加へらる。連歌の宗匠昌琢、玄朔、此歌を聞て、各歌を詠み短冊に書て送り参らす。

いまよりはなるにまかせて行末の春をかぞへよ人のこゝろに 昌琢

なに事もなるにまかする心こそよはひをのぶるくすりなりけれ 玄朔

長政右三首の和歌を台紙におし、裏にみづからの名判をしるして、什襲しおかれる、又昌琢、如水の逝去を聞て、追悼の発句をつかうまつる。

をしみこし春やはつかの夜半の月

と記している。この短冊は現在、福岡市博物館に蔵されている。引用の最後に昌琢の追悼の発句が見えるが、如水追悼の連歌会も、里村家の人々などによって催されている。如水は慶長の役、帰国後、多くの連歌会⁴²に一座しているが、その際、必ず紹巴を始め昌叱、玄仍、玄仲など里村家の人々が連衆となっている。

如水は人に恵まれた人物だと言われる。⁴³例えば、如水の数々の功績は栗山、井上、母里などの良臣の支えによるのであり、これと同じく如水の文化面での活動を担ったのは、茶道では有名な千利休や神谷宗湛、連歌⁴⁵では里村家の人々だといえる。⁴⁶『黒田家譜』には、

十七八歳の比、専歌学を好み、和歌の道を窮めんとおもへる志有り。されども近隣に円満坊といふ僧有りて、諫めければ、実にも今戦国の世なれば、専兵書を翫び、弓馬を業とすべき折なるに、風雅の道は時の要用にあらずとおもひ返して、其事を止めらる。然れども若年の学び有し故、興に乗じ、折にふれては、和歌を詠じ、連歌をつらね、風雅の道を好み給ひし事、弥ふかゝりしとかや。

如水が十七、八歳の頃から文芸に関心があつたと記しているように、慶長以降、連歌に関心を深めたのも既にその素地はできていたのである。

このように連歌を愛好し、連歌を通して里村家と親しい如水が、時代の変遷によって筑前の地に領主の父とし

て起居するようになった。しかも福岡城が完成するまでは、その住居は太宰府天満宮の鳥居の東であつた。この時の様子を『筑前国続風土記』⁽⁴⁷⁾は、

長政公入国の後、其父如水公は此所に閑居し玉ひけるに、今の太宰府の北の、地、其宅のあとあり。此御社の、むかしにかはり、おとろへ行事を歎きおぼして、長政公と共に此事をはかり、中門廻廊九四十を立、其外諸堂末社を作り、諸堂末社今凡四十五区あり凡絶たるをつぎ、廢れたるをおこして、神を尊崇し、社を修復し、社僧祠官を厚くめぐみ玉ひしかば、神も人も共功によりて、古にかへる事を得たり。今に至るまで祠官の輩皆其賜をつく。如水公慶長九年三月廿日に、身まかり玉ひぬ。社僧其めぐみあつきを感じ、年々の正五九月の廿日には、連歌所にもろ／＼つどひて、如水公の為に追懷の連歌を詠る事今に絶えず。

と記している。如水の太宰府での仮寓によつて、太宰府天満宮の建造物の整備や社領の加増がなされ、その中には連歌屋の再興もあつた。そして、その恩に報いるために、如水の没後、連歌の張行がなされたと記している。その如水、長政の黒田家と信岩の大鳥居家の關係について、棚町氏⁽⁴⁸⁾に「大鳥居氏が黒田藩において柳営における里村家の役をも勤めた」という指摘がある。連歌によつて將軍家に仕える里村家という図式は、連歌によつて大名に仕える連歌師となり、既に取り上げたこの『源氏物語』揃の書写者としては、伊達家と石井了俱⁽⁴⁹⁾、加藤家と行生、宗因がそうである。そして今、黒田家と信岩が加わつた。ただし信岩に関しては、これも棚町氏に「如水(初代)・長政(二代)の信岩に対する、『対等』といつてもよいほどの対意識である。」と言つ指摘や、先に長政が「信岩儀は大名にては候へ」と言つた書状を踏まえれば、その上下關係が行生、宗因、了俱の立場とは違つてゐる。

つまり、信岩は、ここまで見てきたように、代々受け継がれてきた太宰府天満宮の別当職として、確固たる社

会的地位の上に、黒田家の連歌会に一座しているのである。その状況は、諏訪勝則氏の、

黒田家の正月の連歌会に太宰府の代表者が参席することは、政治・文化両面において大きな意義があった。という言葉が、信岩という存在をよく示している。この信岩の参座が「政治・文化両面において大きな意義があった」という地位こそが、唯一遠隔地にありながら、この『源氏物語』の書写に参画し、「須磨」を書写した理由であると考えられる。

「須磨」の書写者信岩を考える時、如水や長政の存在抜きには考えられない。言い換えれば、信岩を通して、織豊政権の時代から江戸初期の社会を駆け抜け、動かした如水、長政の姿も浮かび上がってくる。また、信岩は、太宰府の文学を俯瞰する上でも重要な人物であり、その信岩自筆の『源氏物語』が現存するという点でも、この「須磨」の写本は、興味深い一書といえる。

翻刻凡例

- 一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとしたが、異体字・略体字は通行の字体に改めた。
- 一、和歌は改行をし、二字下げとした。
- 一、ミセケチは文字の中央に棒線を付し、訂正文字は右に記した。
- 一、本文の傍書は原本通りとした。
- 一、補入記号がある場合は該当箇所「」を付し、補入文字は右に記した。
- 一、漢字の踊字「〳」は、そのままとした。
- 一、本文の朱点は「・」で示した。
- 一、朱合点は、傍線で示した。
- 一、「須磨」に錯簡がある。「須磨」13才〳54才は「手習」の本文であり、「手習」13才〳41才が「須磨」の本文である。12ウの次に「手習」13才〳41ウにある「須磨」の本文を置き、正しい本文として翻刻した。

(すま)

世中いとわつらはしくはしたなき事のみま
されはせめてしらすかほに有へてもこ

れよりまさる事もやとおほしなりぬかのす

まは昔こそ人のすみかなとも有けれ今は

いと里はなれ心すこくてあまの家たにまれ

になむと聞給へと人しけくひたゝけたらむ

住居はいとほいなかるへしさりとて都をとを

さからんもふるさとおほつかなかるへきを人わろ

くそおほしみたるゝ万の事きしかた行末

思ひつゝけ給にかなしき事いとさまゝ也つき物

と思ひすてつる世も今はとすみはなれなむ事を

おほすにはいとすてかたき事おほかる中にも姫君の

明暮にそへては思なけき給へるさまの心くるしう

哀なるを行めくりても又あひ見む事をかならずと

1才

おほさんにてたに猶三日のほとよそゝにあかし

くらすおりゝたにおほつかなき物におほえ女君

も心ほそうのみ思給へるをいくとせそのほとゝか

きり有道にもあらすあふをかきりにへたゝり

ゆかんもさためなき世にやかてわかるへきかとて

にもやといみしくおほえ給へはしのひてもろ

ともにもやとおほしよるおりあれとさる心ほそ

からん海つらの波風より外に立まじる人もなか

らむにかくらうたき御さまにてひきくし給へ

らんもいときなくわか心にも中ゝ物思ひのつ

まなるへきをなとおほしかへすを女君はいみしからむ

道にもをくれ聞えすたにあらはとおもむけて

うらめしけにおほいたりかの花ちる里にもおはしかよふ

事こそまねなれ心ほそく哀なる御有さまを此

御かけにかくれて物し給へはおほしなけきたるさま

もいとことはり也なをさりにてもほのかに見

1ウ

2才

奉りかよひ給ひし所／＼人しれぬ心をたき給人そ
おほかりける入道の宮よりも物の聞えや又いかゝと
りなされんとわか御ためつゝましけれと忍ひつゝ
御とふらひ常にあり昔かやうにあひおほし哀を

も見せ給はましかはと打思ひ出給にさもさま／＼に
心をのみつくすへかりける人の御契りかなとつらく
思聞え給・三月廿余日の程になむ都はなれ給ける
人にいまとしもしらせ給はすたゝいとちかぶつかう
まつりなれたるかぎり七八人はかり御ともにていと
かすかに出立給さるへき所／＼に御文はかり打

2ウ

忍ひ給ひしにも哀と・しのはるゝはかりつくあい給へる
は見所^も。有ぬへかりしかと・そのおりの^お。まきれにはか／＼
しつもきゝをかす成にけり・二三日かねてよにかくれて
おほいとのにわたり給へりあむしろ^お。車の打やつ
れたるにて女車のやうにてかくろへ入給もいと哀
に夢とのみ見ゆ御かたいとさひしけに打あれたる心
地してわか君の御めのとゝ昔さふらひし人。中にま

かてちらぬかきりかくわたり給へるをめつらしかり聞えて
まうのほりつとひく^て見奉るにつけてもことに物
ふかゝらぬわかき人々さへ世の常なさ思しられて涙

3オ

にくれたりわか君はいとうつくしうてされはしりおは
したり久しきほとに忘れぬこそ哀なれとてひさ
にすへ給へる御けしき忍ひかたけなりおとゝこなたに
わたり給てたいめし給へり・つれ／＼にこもらせ給へ^もらん
程なにと侍らぬ昔物語もまいりきて聞えさせんと
思ふ給れと身のやまひおもきによりおほやけに
もつかうまつらす位をもちへし奉りて侍るにわた

くしさまにはこしのへてなと物の聞えひか／＼しかるへき
を今は世中はゝかるへき身にも侍らねといち
はやき世のいとおそろしう侍るなりかゝる御事を

3ウ

見給ふるにつけて・命なかきは心つく思給へらるゝ
世の末にも侍るかな・あめのしたをさかさまになしても
思ひ給へよさりし御有さまを見給ふれば万いと

あちきなくむと聞え給ていたうしほたれ給とあ
る事もかゝる事も先の世のむくひにこそ侍なれば
いひもてゆけばたゞみつからのをこたりになん侍る
さして官爵をとられずあさはかなる事にかゝつ
らひてたにおほやけのかしこまりなる人のうつし
さまにて世中にありふるはとかおもきわさに人の国に
もし侍るなるをとをくはなちつかはすへきさため

4才

なとも侍るなるはさまことなるつみにあたるへきこそ侍
なれにこりなき心にまかせてつれなくすくし侍らんも
いとほゝかりおほくこれよりおほきなるはちにのそ
まぬさきに世をのかれなんと思ひ給へたちぬるなど
こまやかに聞え給・昔の御物語院の御ことおほし
のたまはせし御心はへなときこえいて給て御なをしの
神もえひきはなち給はぬに君もえ心つよくもも
てなし給はすわか君のなに心なくまきれありきてゝれ
かれになれ聞え給をいみしとおほいたり・すき侍し
人を世に思給へわするゝよなくのみいまにかなしひ

4ウ

侍るをこの御事になんもし侍る世ならましかはいか
やうに思ひなけき侍らましよくそみしかくてかゝる夢
を見すなりにけると思ふ給へなくさめ侍るおさなく物
し給ふかかくよはひ過ぬる中にとゞまり給てなつ
さひきこえぬ月日やへたゞり給はんと思ふ給ふるを
なむ万の事よりもかなしう侍る・いにしへの人もまことに
おかしあるにてもかゝる事にあたらしりけりなをさるへ
きにて人のみかともかゝるたくひおほう侍りけり・
されといひ出るふし有てこそさる事も侍けれと
さまかうさまに思ひ給へよらむかたなくななどとお

5才

ほくの御物語聞え給三位。中將もまいりあひ給て
おほみきなとまいり給に夜更ぬればとまり給て
人々御せむにさふらはせ給て物語なとせさせ給・人
よりはこやう忍ひおほす中納言の君いへはえにかな
しうおもへるさまを人しれすあはれとおほす人みなし
つまりぬるにとりわきてかたらひ給これによりとまり

給へるなるへし明ぬれば夜ふかう出給ふに有明の月
いとおかしう花の木ともやう／＼さかり過てはつか
なる木陰のいと　しるき庭にうすきりわたりたる
そこはかとなく霞あひて秋の夜の哀におほく

5ウ

立まされりすみのかうらむにをしかゝりてとはかり
なめ給ふ中納言の君見奉りをくらむとにやつ
まとをしあけてゐたり又たいめむあらん事こそ
思へはいとかたけれかゝりける世をしらて心やすくも
有ぬへかりし月比をさしもいそかてへたてしよなと
の給へは物も　聞えすなく・わか君の御めのとの宰
相の君して宮のおまへより御せうそこ聞え給
へり・みつからも聞えまほしきをかきくらすみたり心
ちためらひ侍るほとにいと夜ふかく出させ給なるも
さまかはりたる心地のみし侍るかな・心くるしき人
のいきたなきほとはしはしもやすらはせ給はてと
聞え給へれば・うちなき給て

6オ

とりへ山もえし煙もまかふやとあまの塩やく
うらみにそ行御かへりともなく打す　し給て暁の
別はかうのみや心つくしなる思ひしり給へる人も
あらんかしとの給へは・いつとなくわかれといふもし
こそうたて侍るなる中にもけさはなをたくひ有
ましう思ひ給へらるゝほとかなとはな声にて
けにあさからす思へり聞えさせまほしき事も
返々思ひ給へなからたゝにむすほられ侍るほと

6ウ

をしはからせ給へ・いきたなき人は見給へむにつけても
中／＼うき世のかれかたう思給へられぬへけれは
心つよう思ひ給へなしていそきまかて侍と聞え
給・出給ふほとを人々のそきてみ奉る人方の月いと
あかきにいとゝなまめかしうきよらにて物をおほひたる
さまとらおほかみたになきぬへしましていはけなく
おはせしほとよりみ奉りそめてし人々なればたと
しへなき御ありさまをいみしと思ふ・まことや御返
なき人のわかれやいとゝへたゝらむ煙と成し

雲井ならてはとりそへて哀のみつきせず出給ぬる

7才

名残ゆゝしきまてなきあへり殿におはしたれば

わか御かたの人々もまとるまさりけるけしきにて

所くゝむれゐてあさましとのみ世をおもへるけしき也

さふらひにはしたしうつつかうまつるかきりは御とも

まいるへき心まつけてわたくしのわかれおしむほと

にやと人めもなしさらぬ人はとふらひまいるもおもきとかめ

有わつらはしき事まされは所せくつとひし馬

車のかたもなくさひしきに世はうき物なりけりと

おほししるたいはんなともかたへはちりはみてたゝみ

所くゝひきかへしたるみるほどたにかゝりまして

7ウ

いかにあれゆかんとおほす西のたいにわたり給へれ

はみかうしもまいらてなかめあかし給ければすの

こなとにわかきわらはへ所くゝにふしていまそおきさはく

とのあすかたともおかしうていてるをみ給ふにも

心ほそう年月へはかゝる人々もえしも有はてゝ

やゆきちらんとさしも有ましき事さへ御めのみ

とまりける・よへはしかくゝして夜ふけにしかはなむれ

いの・思はすなるさまにやおほしなしつるかくて侍るほと

にたに御めかれすと思ふをかく世をはなるゝきはに

は心くるしき事のをつからおほかりけるをひたやこ

8才

もりにてやは常なき世に人にもなさけなき物と心

をかれはてむ・いとおしうてなんと聞え給へは・かゝる世を

みるより外に思はすなる事は何事にかとはかりの給

ていみしとおほしいれたるさま人よりことなるをことはり

そかしちゝみこはいとをろかにもとよりおほしつきに

けるにまして世の聞えをわつらはしかりてをとつれ聞え

給はず御とふらひにたにわたり給はぬを・人を見るらむ

事もはつかしう中くゝしられ奉らてやみなましを・

まゝ母の北のかたなどの俄なりしさいはひのあは

たゝしさあなゆゝしや思ふ人かたくゝにつけてわか

8ウ

れ給人かなとの給ひけるをさるたより有てもり聞

給にもいみしう心うければこれよりもたえてを
とつれ聞え給はす又たのもしき人もなくけにそ哀
なる御有さまなるなを世にゆるされかたうて年
月をへは岩ほの中にもむかへ奉らんとゝ今は人聞
のいときなかるへきなりおほやけにかしこまりき
こゆる人はあきらかなる月日の影をたに見すやすら
に身をふるまふ事もいとつみおもかなりあやまちな
けれとさるへきにこそかゝる事もあめれと思ふにまし
て思ふ人くするはれいなき事なるをひたおもむきに

9
才

物くるをしき世にて立まさる事も有なむなと聞え
しらせ給日たくるまておほとこのこめり帥の宮三
位中将なとおはしたりたいめし給はむとて御なを
しなと奉る位なき人はとてむもんの御なをし
中くゝいとなつかしきをき給ひて打やつれ給へるいと
めてたし御ひんかき給とてきやうたいにより給へ
るにおもやせ給へる影のわれなからいとあてにきよ
らなればこよなうこそおとろへにけれ此かけのやう

にややせて侍る哀なるわさかなとの給へは女
君涙をひとめうけて見をこせ給へるいと忍かたし

9
ウ

身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ
鏡のかけははなれしときこえ給へは

別ても影たにとまる物ならはかゝみを見て

もなくさめてましはしらかくれにぬかくれて涙を
まきはし給へるさまなをこゝらみる中にたくひ
なかりけりとおほししるゝ人の御有さま也・みこは哀
なる御物語聞え給てくるゝほとにかへり給ぬ・花ちる
里の心ほそけにおほして常に聞え給もことほりにて
かの人も今一たひみすはつらしとや思はんとおほせは
その夜は又いて給物からいと物つくていたうぶかしと

10
才

おはしたれば女御かくかすまへ給て立よらせ給へる事
よろこひ聞え給さま・かきつゝけんもうるさし・いとい
みしく心ほそき御有さまたゝ此御かけにかくれて
すくい給へる年月いとゝあれまさらんぼとおほしや

られて殿のうちにとかすか也月おほるにさし出て
池ひろく山こぶかきわたり心ほそけにみゆるにも・す
みはなれたらん岩ほの中覚しやらる・にしおもては
かうしもわたり給はすやとうちくつしておほしける
に哀そへたる月影のなまめかしうしめやかなるに
打ふるまひ給へる匂ひ似る物なくていと忍ひやか

に入給へはすこしいさり出てやかて月を見ておはす
又こゝに御物語のほどに明かた近う成にけり・みしか
夜の程やかばかりのたいめんも又はえしもやと思こ
そことなしにてすくしつるとし比もくやしうき

しかた行さきのためしに成ぬへき身に何となく
心のとまる世なくこそ有けれとすきにしかたの事と
もの給ひて鳥もしは／＼なけはよにつゝみていそ
き出給ふれいの月の入はつるほとよそへられて哀也
女君のこき御そにうつりてけにぬるゝかほなれは

月かけのやとれる袖はせはくともとめても

10
ウ

の

11
オ

見はやあかぬ光をいみしとおほいたるか心くるしけ
れはかつはなくさめきこえ給

行めくりつゐにすむへき月かけのしはしくも

らん空なゝかめ所思へはかなしやたゝしらぬ涙のみ
こそ心をくらす物なれなどの給て明闇の程に出

給ひ^ゑ 万の事ともしたゝめさせ給したしうつかうまつり

世になひかぬかきりの人々殿の事とりおこなふへき
かみしもさためをかせ給御ともしたひきこゆる

かきりは又えり出給へりかの山里の御すみかのくは
えさらすとりつかひ給へき物ともことさらよそひも

なくことそきて又さるへき文とも文集なといりたる
はこさてはきんひとつそもたせ給所せき御てうとは
なやかなる御よそひなとさらにくし給はすあやしの
山かつめきてもてなし給さふらふ人々よりはしめ万
の事みなにしのたいに聞えわたし給りやうし給み
さうみまきよりはしめてさるへき所／＼のけんなとみ
な奉りをき給それより外のみくらまちおさめとのなと

11
ウ

いふことまで少納言をはか／＼しき物に見をき給へ
 れはしたしき家司ともくしてしろしめすへきま
 ともの給ひあつく・わか御かたの中務中将などやう

12才

の人々つれなき御もてなしなからみ奉るほとこそ
 なくさめつれなに事につけてかと思へとも・命有て此
 世に又かへるやうもあらんを待つけんと思はむ人はこな
 たにさぶらへとの給ひてかみしもみなまつのほらせ給・
 わか君の御めのとたち花散里などにもおかしきさまは
 さる物にて・まめ／＼しきすちにおほしやらぬ事なし・内侍
 のかみの御もとにわりなくして聞え給・とはせ給はぬも
 ことはりに思ふ給へなから今はと世を思はつるほとこのうさ
 もつらさもたくひなき事にこそ侍りけれ

あふせなき涙の川にしつみしやなかるゝみおの

12ウ

はしめなりけんと思ふ給ふるのみなむつみのかれかたう
 侍ける・道のほともあやうければこまかに ^は聞え給は
 す女いといみしうおほえ給て忍給へと御袖よりあま

るも所せうなむ

涙川うかふみなはも消ぬへしなかれて後のせを
 もまたすてなく／＼みたれかき給へる御手いとおか
 しけなり今一たひたいめなくてやとおほすはな
 をくちおしけれとおほしかへして・うしとおほしなす
 ゆかりおほつておほろけなす忍ひ給へはいとあな
 かちにも聞え給はす成ぬあすとの暮には院

13才

の御はかおかみ奉り給とて北山へまうて給 ^{あかつきかけて}月いつる
 比なれはまつ入道の宮にまうて給近きみすの
 前におましまいりて御みつから聞えさせ給春宮の
 御事をいみしくうしろめたき物に思聞え給かた
 みに心深きとちの御物語はた万の哀まさり
 けむかし・なつかしうめてたき御けはひの昔にかは
 らぬにつらかりし御心はへもかすめ聞えさせまほし
 けれといまさらにうたてとおほさるへしわか御心に
 中／＼いま一きはみたれまさりぬへければねんし
 かへしてたゝかく思ひかけぬつみにあたり侍も・思ふ

給へあはする事の一ふしになん空もおそろしう侍る
 おしけなき身はなきにさ^なしても・宮の御代たに
 事なくおはしまさはとのみ聞え給そこはりなるや・
 宮もみなおほししるゝ事にしあれば御心のみつ
 こきて聞えやり給はず大将万の事がきあつめ
 おほしつゝけてなき給へるけしきいとつきせずなま
 めきたり・御山にまいり侍るを・御ことつてやと
 聞え給に・とみに物聞え給はすわりなくためらひ
 給ふ御けしきなり

見しはなくあるはかなしき世のはてをそむきし

かひもなく／＼そふるいみしき御心まとひともおほ
 しあつむる事ともゝえそつゝけさせ給はぬ

わかれしにかなしき事はつきにしを又そ此世の
 うさはまされる月まち出いて給ふ御ともにたゝ

五六人はかりしも人もむつまじきかきりして御馬
 にてそおはする・さらなる事なれと有し世の御

13
ウ14
オ

ありきにことなり・みないとかなしう思ふ中にかの
 みそぎの日かりのみすいしんにてつかうまつりし
 右近のそうの蔵人うへきかふりも程すぎ
 つるをつゐにみふたけつられつかさもとられて

はしたなければ御ともまいるうちなりかものしも
 のみやしろをかれとみわたすほとふと思ひ出ら
 れておりて御馬のくらをとる

引つれて葵かさしゝそのかみを思へはつらし
 かものみつかきといふをけににかに思ふらむ人よりけ
 にはなやかなりし物をとおほすも心くるしき君も

御馬よりおり給て御やしろの方おかみ給神 ^{かみ} かり申し給
 うき世をは今そわかるゝとゝまらんをはたゝすの
 神にまかせてとのたまふさま物めてするわかき人にて
 身にしみて哀にめてたしと見奉る御山にまつて

給ておはしましゝ御有さまたゝめのまへのやうに
 おほし出らる・かきりなきにても世になく成ぬる人そ

14
ウ15
オ

いはんかたなくちおしきわさなりける万の事を
なく／＼申給てもそのことはりをあらはにえつけ

給はりたまはねはさばかりおほしの給はせしさま／＼の
御ゆいこんはいつちかきえうせにけんといふかひなし御
はかは道の草しけく成て分いり給ほといと／＼露

けきに月も雲かくれて森の木たちこふかく心

すこしかへり出んかたもなき心地しておかみ給に有

し御おもかけさやかにみえ給へるそゝるさむきほと也

15
ウ

なきかけやいかゝみるらんよそへつゝなかむる月も

雲かくれぬる明はつるほにかへり給て春宮にも

御せうそこ聞え給王命婦を御かはりとてさふら

はせ給へはそのつほねにとてけふなむ都はなれ

侍る又まいり侍らす成ぬるなむあまたのつれへに

まさりて思ふ給へられ侍る万をしはかりてけい

し給へ

いつか又春の都の花を見ん時うしなへる山賤

にして桜のちりすきたる枝につけ給へり・かくなん

と御らむせすれは・おさなき御心地にもまみた

16
才

ちておはします・御返りいかゝ物し侍らむとけいす

れは・しはし見ぬたに恋しき物をとくはまして

いかにといへかしのたます・物はかなの御かへりやとあ

はれに見奉るあちなき事に御心をくたき給し

昔の事おり／＼の御有さま思ひつゝけらるゝにも

物思ひなくてわれも人もすくい給つへかりける世を

心とおほしなけけるをくやしう我心ひとつにかゝらん

事のやうにそおほゆる御返りはさらに聞えさせやり

侍らすおまへにはけいし侍め心ほそけに覚しめしたる

御けしきもいみしうなむとそこはかたなく心のみたれ

16
ウ

けるなるへし

さきてとくちるはうけれと行春は花の都を

たちがへりみよ時しあらはと聞えて名残も哀なる

物かたりをしつゝひと宮のうち忍てなきあへりひ

とめも見奉れる人はかく覺しくつおれぬる御あり

さまをなけきおしみきこえぬ人なしまして常に
まいりなれたりしはしりをよみ給ましきおさめみかは
やうとまで有かたき御かへりみのしたなりつるを
しはしにても見奉らぬほとやへんと思ひなけき
けり大がたの世の人もたれかはよろしく思ひ聞えむ

17
才

七に成給ひし此かたみかとの御まへによるひるさぶらひ
給てそうし給事のならぬはなかりしかは此御いたはり
にかゝらぬ人なく御とくをよろこばぬやばありしや
むことなきかむたちめ弁官などの中にもおほかり
それよりしも ^は かすしらぬ思 ^す しらぬにはあらねとさし
あたりていちはやき世を思ひはゝかりてまいりよる
もなし世ゆすりておしみ聞えしたにはおほやけ
をそしりうらみ奉れと身をすてゝとぶらひまい
らむにもなにかひかはと思ふにやかゝるおりは
人わるくうらめしき人おほく世中はあきなき

物かなとのみ万につけておほすその日は女君に御物語

17
ウ

のとかに聞えくらし給ひてれいの夜深くいて給かりの
御そなとたひの御よそひいたくやつし給て月出

にけりな猶すこし出て見たにをくり給へかしいかにき
こゆへき事おほくつもりにけりとおほえむとすらん
一日二日たまさかにへたつるおりたにあやしきいふ
せき心ちする物をとてみすまきあけてはしに

いさなひ聞え給へは女君なきしつみ給へるためらひ
ていさり出給へる月かけにいみしうおかしけにてゐ給へ
りわか身かくてはかなき世をわかれなはいかなるさまに

18
才

さすらへ給はむとうしろめたくなしけれとおほしいり
たるかいとゝしかるへければ

いける世のわかれをしらて契りつゝ命を人に

かきりけるかなはかなしなとあさはかに聞えなし給へは

おしからぬ命にかへてめのまへのわかれをしはし
とゝめてしかなけにさそおほさるらむといと見すて

かたけれとあけはてなはしたなかるへきによりいそ
き出給ひぬ道すからおもかけにつとそひてむねも

ふたかりながら御舟にのり給ぬ日なき比なれば
をひ風さへそひてまたさるの時はかりにかの浦につき

18
ウ

給ぬかりその道にてもかゝるたひをならひ給はぬ心
地に心ほそさもおかしさもめつらかなりおほえ殿と
いひける所はいたうあれて松はかりそしるしなりける

から国に名を残しける人よりもゆくゑしら

れぬ家居をやせむなきさによる浪の 帰るを見給

てつら山しくもとうちすし給へるさまさる世の

ふることなれとめつらしくきゝなされかなしとの

み御ともの人々思へりうちかへり見給へるにこし

かたの山のはかすみはるかにてまことに三千里の外

心地するにかいのしつくもたへかたし

19
オ

古郷をみねの露はへたつれとなかむる空はおなし

雲井かつらからぬ物なくなむおはすへき所は行平の

中納言のもしほたれつゝわひける家居近きわた

りなりけり海つらはやゝいりて哀に心すこけなる山

中なりかきのさまよりはしめてめつらかに見給かやゝ
ともあしふけるらうめくやなとおかし しまひ
なしたり所につけたる御住居やうかはりてかゝる
おりならすはおかしうもありなましと昔の御心の
すさひおほしいつゝ近き所くのみさうのつかさ
めしてさるへき事ともなとよしきよの朝臣したし

19
ウ

きけいしにておほせおこなふも哀なり時のまにいと
み所ありてしなさせ給水ふかしやりなしうへ木とも
なとして今いとしつまり給心地うつゝならす国の守
もしたしきとの人なれば忍て心よせつかうまつるかゝる

たひ所ともなく人さはかしけれともはかゝしう

物をもの給ひあはすへき人しなればしらぬ国の

心地していとむもれいたくいかて年月をすくさま

しとおほしやらるやうく事しつまりゆく長雨

の比に成て京の事ともおほしやらるゝに恋しき

人おほく女君のおほしたりしさま春宮の御事

20
オ

わか君なに心こゝろなくまきれ給しなとをはしめこゝ
かしと思やり聞え給京へ人いたしたて給二条院へ
奉り給と入道宮のとはかきもやり給はすく
らされ給へり宮には

松島のおまのとまやもいかならんすまの浦人
しほたるゝころいつと侍らぬ中にもきしかた行きき
かきくらしみきはまさりてなむ内侍のかみの御もとにれい
の中納言の君のわたくしことのやうにて中なるに
つれ／＼と過にしかたの思ひ給へ出らるゝにつけても
こりすまの浦のみるめもゆかしきを塩やく

20ウ

あまやいかゝ思はんさま／＼かきつくし給ことの葉思ひ
やるへし大殿にも宰相のめのもとにつかうまつるへ
き事なとかきつかはす京には此御文所／＼に見給
つゝ御心みたれ給人々のみおほかり二条院の君はその
まゝにおきもあかり給はすつきせぬさまにおほし
こかるれはさふらふ人々もこしらへわひつゝ心ほそく思ひ
あへりもてならし給ひし御てうとゝも引ならし給ひ

し御ことぬきすて給へる御そのにほひなとにつけ
ても今はと世になからん人のやうにのみおほしたれは
かつはゆゝしくて少納言は僧都に御いのりの事なと聞ゆ

21オ

二かたにみすほうなとせさせ給かつはかくおほしなけく
御心しつめ給て思なき世にあらせ奉り給へと心
くるしきまゝにいのり申給たひのとのみ物なとてう
して奉り給かとり御なをしさしぬきさまかはりたる
心地するもいみしきにさらぬ鏡との給ひし御面影
のけに身にそひ給へるもかひなし出入給ひしかたより
み給ひしまき柱なとをみ給にもむねのみふたかりて
物をとかう思めくらし世にしほしみぬるよはひの人
たにありましてなれむつつきこえちゝはゝにも成
ておほしたてならはし給へれば恋しう思きこえ

21ウ

給へることはりなりひたすら世になく成なむはいはん
かたなくてやう／＼忘れ草もおひやすらんきく程
は近けれといつまでとかきりある御わかれにもあら

ておほすにつぎせずなむ入道の宮にも春宮の

御ことによりおほしなけくさまいとさらなり御すくせ
のほとをおほすにはいかゝあさくはおほされむ年比は
たゝ物の聞えなどのつゝましさにすこしなさけある
けしき見せはそれにつけて人のとかめ出る事もこ
そののみひとへにおほし忍ひつゝ哀をもおほつ御ら
むしすこしすくゝしうもてなし給しをかはかりに

22才

うき世の人ことなれとかけてもこのかたにはいひ出る
事なくてやみぬるはかりの人の御心むけもあ

なかななりし心のひくかたにまかせすかつはめやすく
もてかくしつるそかし哀に恋しうもいかゝおほし

出さらん御かへりもすこしこまやかにて・此ころはいとゝ

しほたるゝことをやくにて松島に年ふる海士も

なけきをそつむかむの君の御かへりには

浦にたくあまたにつゝむ恋なれはくゆる煙よ

行かたそなきさらなる事ともはえなとはかりいさゝか
にて中納言の君のなかにありおほしなけくさまなと

22ウ

いみしくいひたり哀とおもひ聞え給ふしゝもあれは
打なかれ給ぬ姫君の御文は心ことにこまかなりし
御かへりなれはあはれなる事おほくて

浦人のしほくむ袖にくらへみよ浪路へた

つるよるの衣を物の色し給へるさまなといときよ
らなりなに事もらうゝしう物し給を思ひさまに

て今はことゝに心あはたゝしうゆきかゝつらふかたもなく

しめやかにてあるへき物をとおほすにいみしうくち

おしうよるひるおもかけにおほえてたへかたう思出られ

給へはなを忍ひてやむかへましとおほす又うち

23才

かへしなそやかくうき世につみをたにうしなはんとお

ほせはやかて御しやうしにてあけくれおこなひて

おはす大とのゝわか君の御ことなとあるにもしとかな

しけれとをのつからあひ見てむ・たのもしき人々も

のし給へはうしろめたうはあらずとおほしなざるゝは

中ゝ此みちのまとはれぬにやあらむまことやさは

かしかりしほとのみきれにもらしてけり・かの伊勢の
宮へも御つかひ有けりかれよりもふりはへたつね
まいれりあさからぬ事ともかき給へりことの葉筆
つかひなとは人よりことになまめかしういたり深く

23
ウ

みえたり・なをうつゝとは思ひ給へられぬ御住居をう
け給もあけぬ夜の心まとひかとなむさりともし年
月はへ給^はしと思やり聞えさするにもつみふ
かき身とのみこそ又聞えさせん事もはるかな
るへければ

うきめかるいせおのあまを思ひやれもしほ
たるてふすまの浦にて万に思ふ^ひ給へみたるゝ世の
有さまもなをいかに成はつへきにかとおほかり

伊勢島や塩ひのかたにあさりてもいふかひなきは
我身なりけり物をあはれとおほしけるまゝにうち

24
オ

をきくかき給へる白き唐のかみ四五まいはかりを
まきつゝけてすみつきなと見所あり哀に思ひ

聞えし人を・一ふしうしと思聞えし心あやまりに
かの宮す所も思ひうむしてわかれ給にしとおほ
せは今にいとおしうかたしけなき物に思ひ聞え給
おりからの御文いと哀なれば御つかひさへむつ
ましうて二三日すへさせ給てかしこの物語なとせ
させてきこしめすわかやかにけしき有さふらひ
の人なりけり・かく哀なる御住居なればかやう
の人もをのつから物とをからてほの見奉る御

24
ウ

さまかたちをいみしうめてたしと涙おとしをりけり・
御かへりかき給ことの葉思ひやるへし・かく世をはなる
へき身と思給へましかはおなしくはしたひきこえ
まし物をとなむつれく心ほそきまゝに

伊勢人の浪の上こくを舟にもつきめはからて
のらまし物を

あまかつむなけきの中にしほたれていつまで
すまの浦になかめんきこえさせむ事のいつとも侍らぬ
こそつきせぬ心地し侍るなとそ有けるかやうにいつ

こにもおほつかなからず聞えかはし給花ちる里も

25
才

かなしとおほしけるまゝにかきあつめ給へる御心く見
給ふにおかしきもめなれぬ心地していづれもうち
見つゝなくさめ給へと物思のまよほしくさなめり

あれまきる軒の忍ぶを詠つゝしけくも露の

かゝる袖かなとあるをけにむくらより外のうしろみも
なきさまにておはすらむとおほしやりて長雨につひ
地所くつれてなと聞給へは京のけいしのもとに
おほせつかはして近き国くのみさつの物なともよ
ほさせてつかうまつるへきよしのたまはすかむの君
は人わらへにいみしうおほしくつおるゝをおとゝいとかな

25
ウ

しつし給ふ君にてせちに宮にも内にもそつし給
ければかきりある女御宮す所にもおはせず大やけ
さまの宮つかへとおほしなをり又かのにくかりしゆへこそ
いかめしき事もいてこしかゆるされ給てまいり給へき
につけてもなを心にしみにしかたそ哀におほえ給ける

七月になりてまいり給いみしかりし御思ひの名残なれ
は人のそしりもしろしめされすれのうへにつとさ

ふらはせ給て万にうらみかつは哀に契らせ給御さまか
たちもいとなまめかしうきよらなれと思出ることのみ
おほかる心のうちそかたしけなき・御あそひのつめてに・

26
才

その人のなきこそ さうくしけれ・いかにましてさ思ふ人
おほからむなに事も光なき心地するかなとの給はせ
て院のおほしの給はせし御心をたかへつるかなつみう
らんかして涙くませ給にえねんし給はす世中こそ
あるにつけてもあちなき物なりけれと思しるまゝに
久しく世にあらむ物となむさらに思はぬさもなりなむ
に・いかゝおほさるへき・近きほとのに思ひおとされん
こそねたけいける世にとはけによからぬ人のいひをき
けんといとなつかしき御さまにてものをまことに哀と
覺し入てのたまはするにつけて・ほろくこほれ

26
ウ

いつれは・さりやいつれにおつるにかとの給はす・今まで

みこたちのなきこそさうくしけれ春宮を院のく

給はせしさに思へしと・よからぬ事ともいてしめれは心

くるしうなと世を御心の外にまつりこちなし給人の

あるにわかき御心のつよき所なきほとにていとおしと

おほしたることもおほかり・すまにはいと心つくしの

秋風に海はすこしとをけれと行平の中納言の聞

吹こゆるといひけむつら浪よるくはけにいとちかく

聞えて又なく哀なる物はかゝる所の秋なりけり

御前にいと人すくなにて打やすみわたれるに

27才

ひとりめをさまして枕をそはたてゝ四方のあらしを

きゝ給に波たゝこゝもとにたちくる心地してなみた

おつともおほえぬに枕つくはかりに成にけりことをすこ

しきかならし給へる 我なからいとすこし聞ゆれば引さし給て

恋侘て鳴音にまかふ浦波は思ふかたより

風やふくらむとうたひ給へるに人々おとろきてめて

たうおほゆるに忍はれてあいなふおきあつゝはなを

忍やかにかみわたす・けにいかに思ふらむ我身ひとつに

よりおやはらからかた時立はなれかたくほとに

つけつゝ思ふらん家を別てかくまとひあへるとおほ

27才

すにいみしくていとかく思ひしつむさまを心ほそしと

思ふらんとおほせはひるはなにくれとたはふれこと

うちのたまひまきはしつれくなるまゝに色く

のかみをつきつゝ手ならひをし給ひめつらしきさま

なるからのあやなとにさまくの氣とををかきす

さひ給へる屏風のおもてともなといとめてたく見

所あり人々のかたり聞えし海山のありさまをはる

かにおほしやりしを御めに近くてはけにをよは

ぬいそのたゝすまもなくかきあつめ給へり此比の

上手にすめる千枝つねのりなとをめてつくり

28才

桑つかうまつらせはやと心もとなかりあへりなつかしう

めてたき御さまに世の物思ひ忘れて近うなれ

つかうまつるをうれしき事にて四五人ばかりそつと

さふらひける前栽の花色く咲みたれおもしろき

夕暮に海見やらるゝ廊に出給てたゝすみ給御

さまのゆゝし^くきよなること所からはまして此

世の物ともみえ給はすしろきあやのなゝかなるし

おん色なと奉りてこまやかなる御なをしおひしとけ

なく打みたれ給へる御さまにて尺迦牟尼仏弟子と

なのりてゆるゝかによみ給へるまたよにしらす聞ゆ

おきより舟とものうたひのゝしりてこき行なと^も聞ゆ

ほのかにたゝちい^いさき鳥のうかへると見やらるゝも

心ほそけなるにかりのつらねて鳴声^かちの音に

まかへるをうちななめ給て涙のこほるゝをかきはらひ

給へる御手つきくろき御すゝにはへあへるは古

郷の女恋しき人々の心みななくさみにけり

はつかりは恋しき人のつらなれやたひのそら

飛こゑのかなしきとのたまへはよしきよ

かきつらね昔のことそおもほゆるかりはその

世の友ならねとも民部大輔

28
ウ

心からとこ世をすてゝ鳴雁を雲のよそにも

おもひけるかなさきの右近^せのそつ

とこ世出て旅の空なるかりかねもつらにをくれぬ

ほとそなくさむ友まとはしてはいかに侍らましといふ

おやのひたちに成てくたりしにもさそはれてまい

れるなりけりしたには思ひくたくへかめれとほこり

かにもてなしてつれなきさまにしありく月のいと

はなやかにさし出たるにこよひは十五夜なりけりと

おほし出て殿上の御あそひ恋しく所ゝななめ給らん

かしと思ひやり給につけて月のかほのみまほられ

給二千^里外故人心とすんし給へるれいの涙もとゝ

められす入道の宮の霧やへたつるとのたまひし程

いはんかたなく恋しく^うおりゝの事思ひ出給によゝと

ななめ給夜更^侍ぬと聞ゆれとなをいり給はす

みる程そしはしなくさむめぐりあはむ月の都は

はるかなれともその夜うへのいとなつかしう昔物語

なとし給し御さまの院に似奉り給へりしも恋し

29
ウ

29
オ

う思ひ出聞え給て恩賜の御衣は今こゝに有とす^ん

しつゝ入給ぬ御そはまことに身はなたすかたはらにをき給へり

うしとのみひとへに物はおもほえてひたりみきにも

30才

ぬるゝ袖かなそのころ大貳はのほりけるいかめしうるいひろ

くむすめかちにて所せかりければ北のかたは舟にてのほる

浦伝ひにせうようしつゝくるに外よりもおもしろき

わたりなれば心とまるに大将かくておはすときけはあ

いなくすいたるわかきむすめたちは舟のうちさへはつか

しう心けさうせらるまして五節の君はつなて引す

くるもくちおしきにことの声風につきてはるかに聞

ゆるに所のさま人の御ほと物の音の心ほそさとり

あつめ心あるかきりみななきにけりそち御せうそこ

聞えたりいとはるかなる程よりまかりのほりてはまつ

30ウ

いつしかさふらひて都の御物語もこそ思ひ給へ侍つ

れ思ひの外にかくておはしましける御やとをまかり

過侍るかたしけなかなしうも侍かな・あひしりて侍る人々

さるへきこれかれまできむかひてあまた侍れば所

せさを思ひ給へはゝかり侍る事とも侍てえさふらは

ぬことさらにまいり侍らんなと聞えたり子のちく

せんのかみそまいれる此殿の藏人になしかへりみ給し

人なれはいともかなしいみしと思へともまたみる人々

のあれは聞えを思ひてしはしもえたちとゝまゝす・

都はなれて後昔したしかりし人々あひみる事がたぐ

31才

のみなりにたるにかくわざと立より物したる事との給ふ

御返しもさやうになんかみなくゝかへりておはする御

有さまかたるにそちよりはしめむかへの人々まかゝ

しうなきみちたり五節はとかくして聞えたり

琴の音に引とめらるゝつなて縄たゆたふ心

君しるらめやすきゝしさも人なとかめそと聞え

たりほゝゑみて見給・いとほつかしけなり

心ありて引てのつなのたゆたはゝうち過ましや

すまのうら波いさりせむとはおもはさりしはやと

ありむまやのおさにくしとらする人も有けるを

ましておちとまりぬへくなむおほえける都には月日
過るまゝにみかとはしめ奉りてこひきこゆるおり
ふしおほかり春宮はまして常におほし出つゝ忍ひ
てなき給をみ奉る御めのとまして命婦の君は

いみしう哀に見奉る入道の宮は春宮の御事をゆゝ
しうのみおほしゝに大將もかくさすらへ給ぬるを
いみしうおほしなける・御はらからのみこたちむつ
ましう聞え給しかむたらめなとはしめつかたは
とふらひ聞え給なとありき哀なる文をつくり

かはしそれにつけても世中にのみめてられ給へは

ききいの宮きこしめしていみしくの給けり大やけ

のかうしなる人は心にまかせて此世のあちはひをたにしる
ことかたうこそあなれおもしろき家ぬして世中をそしり
もときてかの鹿を馬といひけん人のひかめるやうにつあせ
うするなとあしき事とも聞えければわつらはしとてたえ
てせうそこ聞え給人なし・二条院の姫君は程ふるまゝ

31
ウ

におほしなくさむおりなしひんかしのたいにさふらひし
人々もみなわたりまいり^しはしめはなとかさしも
あらむと思しかと見奉りなるゝ程になつかしう
おかしき御有さまめやかなる御心はへも思や^う

32
ウ

深く哀なればまかてちるもなしなへてならぬきはの
人々にはほのみえなとし給そこらの中にすぐれたる
御心さしもことはりなりけりとみ奉る・かの御住居
には久しう成まゝにえねんしすこすましうおほえ
給へと我身たにあさましきすくせとおほゆる住ぬに

ていかてかは打くしてはつきながらんさまを思かへし給所
につけて万の事さまかはり見給へしらぬしも人のうへ

をも見給ならはぬ御心地にめさましつかたしけな^う
みつかからおほさる煙のいと近う時ゝ立くるをこれ
やあまのしほやくならむとおほしわたるはおはします

33
ウ

うしろの山に柴といふ物ふすふるなりけりめつらかにて
山かつの庵りにたけるしはゝもことゝひこなん

こふるさと人冬に成て雪降あれたる比空のけし
きもことにすくなかめ給て琴を引すさひ給て

よし清に哥うたはせ大輔よこ笛吹てあそひ給

心とゝめて哀なる手なと引給へるにこと物の声ともは
やめて涙をのこひあへり昔胡の国につかはしけん女を
おほしやりてましていかなりけむ此世に我思聞ゆる人など
をさやうにはなちやりたらんことなと思ふもあらむこと
のやうにゆゝしうて霜の後の夢とすむし給月いと

33
ウ

あかうさし入てはかなき旅のおまし所はおくまてくまなし
ゆかのうへに夜ふかき空もみゆ人かたの月の影すこく
見ゆるにたゝこれ西に行なりとひとりこち給ふて

いつかたの雲路に我もまよひなむ月の見るらん

こともはつかしひとりこち給てれいのまゝとるまれぬ

曉の空に千鳥いとあはれに啼

友千鳥もろ声になく曉はひとりねさめの

床もたのもしまたおきたる人もなければ返くゝひ
とりこちてふし給へり夜ふかく御てうつまいりて

ねんすなとし給もめつらしき事のやうにめてたくのみ

おほえ給へはえみ奉りすてす家にあからさまにもえ出
さりけり・明石の浦はたゝはひわたる程なればよし清
の朝臣かの入道のむすめを思ひいてゝ文なとやりけれ
と返事もせず父の入道そきこゆへき事なんあか

らさまにたいめむもかなといひけれとつけひかさらん物
ゆへ行かゝりてむなしくかへらむつしる手もおこなるへし
とくつしいたぐいかす世にしらす心たかう思へるに國
のうちはかみのゆかりのみこそはかしこき事にすめれとひ
かめる心はさらにさも思はて年月をへけるに此君かくて
おはすと聞てはゝ君にかたらふやうきりつほの更衣

34
ウ

の御はらの源氏の光君こそ大やけの御かしこまり
にてすまの浦に物し給なれあこの御すくせにて
おほえぬ事の有なりいかてかかゝるつゐてに此君に
奉らむといふはゝあながたはや京の人のかたるをきけ
はやむことなき御めともいとおほくも給てその

34
オ

あまり忍ひ／＼みかとの御めをさへあやまち給て
かくもさはかれ給なる人はまさにかくあやしき山かつ
を心とゝめ給てんやといふはらちてえしり給はし
思ふ心ことなり・さる心をし給へつゝめてしてこゝに
もおはしまさせむと心をやりていふもかたくなしく

35
才

みゆまはゆきましてつらひかしつきけり母君などか
めてたくとも物のはしめにつみにあたりてなかされ
おはしたゝん人をしも思ひかけむさても心とゝめ給
へくはこそあらめたはふれにてもあるましき事なりと

いふを・いといたくつふやくつみにあたる事はもろこし

にもわか御門にもかく世にすくれなに事にも人に

ことに成ぬる人のかならず有事也いかに物し給君そ

こ母宮す所はをのかおちにものし給し按察大納言

のみむすめなりいとかうさくなる名をとりて

宮つかへにいたし給へりしにくくわすくれて時

35
才

めかし給ことならひなかりけるほとに人のそねみおほくて

うせ給にしかと此君のとまり給へるいとめてたしか
く女は心たかくつかふへき物也をのれかゝるあ中人
なりとて覺しすてしなといひぬたり此むすめす

くれたるかたちならねとなつかしうあてはかに心はせ有
るさまなとそけにやんことなき人におとるましかり
ける身のありさまをくちおしき物に思ひしりてたかき
人はわれを何のかすにもおほさし程につけたる世をは
さらにみし命なかくて思ふ人々にをくれなは尼に
も成なん海のそこにも人なむなと思ける父君

36
才

所せく思ひかしつきて年に二たひ住吉にまうて

させけり神の御しるしをそ人しれすたのみ思ひける・

すまには年かへりて日なかくつれ／＼なるにうへし

若木のさくらほのかに咲そめて空のけしきうら／＼か

なるに万のこと覺し出られてうちなき給ありお

ほかり二月廿日あまりいにし年京をわかれし時

心くるしかりし人々の御有さまなといと恋しく南殿

の桜はさかりに成ぬらん一年の花のえむに院の御けし

き内のうへのいときよらになまめいてわかつく
れる句をすし給しも思出聞え給

いつとなく大宮人の恋しきにさくらかさしゝ

けふも来にけりいとつれ／＼なるに大殿の三位^〇 中將は

今は宰相に成て人からのいとよければ時世のおほえ

おもくて物し給へと世中あはれにあちきなく物の

おりことに恋しく覚え給へはこの聞え有てつみに

あたるともいかゝはせむとおほしなりて俄にまうて給うち

見るよりめつらしくうれしさにもひとつ涙そこほれけ

る住ぬ給へるさまいはむかたなくからめいたり所のさま

系にかきたらんやうなるに竹あめるかきし渡して

石のはし松のはしらをろそかなる物からめつらかにおかし

37
才

山かつめきてゆるし色のきかちなるに青にひのかり

きぬさしぬき打やつれてことさらにあみもてなし

給へるしもいみしう見るに象まれてきよらなりとり

つかひ給へるてうともかりそめにしなしておまし所もあら

36
ウ

はら見いれらるゝ すぐろくのはんてうとたきのくなと

ゐ中わさにしなしてねんすのくおこなひつとめ給

けりとみえたり物まいれるなどことさら所につけ

けふありてしなしたりあまともあさりしてかいつもの

もてまいれるをめし出て御らむす浦に年ふる

さまなとはせ給にさま／＼やすけなき身のう

37
ウ

れへを申すそこはかとなくさえつるも心の行系は

おなしことなにかことなるとあはれにみ給ふ御そ

ともなとかつけさせ給をいけるかひありと思へり御

馬ともちかふたてゝ見やりなるゝくらかなにそなる

いねとり出でかふなとめつらしうみ給あすかひすこし

うたひて月比の御物かたりなきみわらひみわ君

のなにとも世をおほさて物し給かなしさをおとゝの

明くれにつけておほしなけくなとかたり給にたへかたく

おほしたりゝつきすへくもあらねは中／＼かたはし

もえまねはす夜もすからまとるますふみつくり

38
才

あかし給さいひなからも物の聞えをつゝみていそぎ
かへり給いと中／＼なり御かはらけまいりて酔のかなし
み涙そゝく春のさかつきのうちとる声に
すむし給御ともの人も涙をなかずをのかし／＼は
るかなる別をおしむへかめり朝ほらけの空に雁つ
れて渡るあるしの君

古郷をいつれの春か行て見むうらやましきは
かへるかりかね宰相さらに立いてん心地せて

あかなくにかりのとこよを立わかれ花の都に
道やまとはんさるへき都のつとなとよしある

さまにてありあるしの君かくかたしけなき御をくり
にとてくろこま奉り給ゆゝしうおほされぬへけ
れと風にあたりにはいはへぬへければなんと申給
世にありかたけなる御馬のさまなりかたみに忍び
給へとていみしき笛の名有けるなどはかり人と
かめつへき事はかたみにえし給はす日やう／＼
さしあかりて心あはたゝしければかへりみのみし

38
ウ

つゝ出給を見をくり給けしきいと中／＼なりいつ又
たいめむたまはらむとすらんざりともかくてやはと
申給にあるし

雲近く飛かふたつも空にみよわれは春日の

くもりなき身そかつはたのまねなからかく成ぬる人は
昔のかしこき人たにはか／＼しう世に又ましふ事
かたく侍ければなにか都のさかひを又見むとなむ

思ひ侍らぬなどのたまふ宰相

たつかなき雲ゐにひとりねをそなくつはさならへし
友を恋つゝかたしけなくね聞え侍ていとしもとく
やしう思給へらるゝおりおほくなんとしめやかにも
あらてかへり給ぬる名残いとかなしうなかめくらし給ふ
やよひのついたりに出きたるみの日けふなんかく

おほす事ある人はみそきし給へきとなまさかしき
人の聞ゆれば海つらもゆかしうて出給いとをろ
そかにせんしやうばかりを引めくらして此国にかよひ

39
ウ39
オ

ける陰陽師めしてはらせさせ給舟にことゝ

しき人かたのせてなかずをみ給にもよそへられて

しらすりし大海の原になかれ来てひとかたにやは
物はかなしきとてゐ給へる御さまさるはれに出ていふ

よしなくみえ給海のおもて浦／＼となきわたりて

ゆくゑもしらぬにこしかた行さきおほしつゝけられて

やをよるつ神も哀と思ふらんをかせるつみの

それとなければとの給に俄に風吹出て空もかき

くれぬ御はらへもし果す立さはきたりひちかき雨

とかふりきていとあはたゝしければみなかへり給はん

とするにかさもとあへさる心もなきに万ふき

ちらし又なき風なり浪いとかめしく立きて人々

のあしをそら也海のおもてはぶすまをはりたらん

やうに光みちて神なりひらめくおちかゝる心地し

てからうしてたとりきてかゝるめはみすも有かな

風なとはふくとけしきつきてこそあれあさまし

うめつらかなりとまとふになをやますなりみちて

40
才

40
ウ

雨のあしあたる所とをりぬへくはらめきおつかくて世

はつきぬるにやと心ほそく思まとふに君はのとやかに

経うちす^ん しておはす暮ぬれば神すこしなりやみ

て風そよるも吹おほくたてつる願の力なるへし

今しはしかくたにあらは波にひかれて入ぬへかり

けりたかしほといふ物になむとりあへず人そこなは

るゝとはきけといとかゝる事はまたしらすといひあへ

り晩かたみなうちやすみたり君もいさゝかねいり

給へれはそのさまともみえぬ人きてなと宮より

めしあるにはまいり給はぬとてたとりありくと

41
ウ

みるにおとろきてさは海の中の龍王のいとい

たう物めてする物にてみいれたるなりけりと

おほすにいと物むつかしう此住ぬたへかたくおほし成ぬ

41
ウ

(あかし)

なを雨風やます神なりしつまらてひころ

になりぬいと物わひしき事かすしらすきし

かたゆくさきかなしき御ありさまに心つようしも

えおほしなすいかにせましかりとて宮こにかへ

らん事もまた世にゆるされもなくては人わらは

れなることこそまさらめなをこれよりふかき山を

もとめてやあとたえなましとおほすにも浪

かせにさはかされてなと人のいひつたへん事

のちの世までもいとかるくしきなをやなかし

はてんとおほしみたる・御夢にもたゝおなしさま

1才

なる物のみきつゝまつはしきこゆとみ給くもま

もなくてあけるゝ日かすにそへて京のかた

もいとゝおほつかなくかなから身をはふらかしつる

にやと心ほそうおほせとかしらさしいつへくも

あらぬ空のみたれにいてたちまいる人もなし

二条院よりそあなかちにあやしきすかたにてそ

ほちまいれる道かひにてたに人か何そとたに

御らんしわくへくもあらずまつをひはらひつへ

きしつのおのむつまじうあはれにおほさるゝも

我なからかたしけなくしにける心のほとおもひ

しらる御ふみには・あさましくをやみなきころの

けしきにいとゝ空さへとつる心ちしてなかもやる

かたなくなむ

うら風やいかに吹らんおもひやる袖うちぬらし

なみななきころあはれにかなしき事ともかき

あつめ給へあひきあくるよりいとゝみきはま

さりぬへくかきくらす心ちしたまふ・京にもこの

雨かせいとあやしきものゝさとしなりとて仁王

会などおこなはるへしとなむきこえ侍し

内にまいり給かんたちめなとすへてみちと

1ウ

2オ

ちてまつりこともたえてなむ侍るとはかゝし
 うもあらずかたくなしうかたりなせと京のかた
 の事とおほせはいふかしうておまへにめしいてゝ
 とはせ給たゞれいの雨のをやみなくふりて風は
 とき／＼吹いてつゞ日ころになり侍をならぬこ
 とにおとろき侍なりいとかく地のそこをるは
 かり。ひふりいかつちのしつまらぬことは侍らざりき
 なといみしきさまにおとろきおちてあるかほの
 いとかしきにも心ほそさまさりけるかくしつゞ世
 はつきぬへきにやとおほさるゝにそのまたの

2ウ

日のおかつきより風いみしうぶきしほたかうみち
 てなみのをとあらしき事はいはほも山ものこるまし
 きけしきなり神のなりひらめくさまさらにい
 はむかたなくておちかゝりぬとおほゆるにあ
 るかきりさかしき人なし・われはいかなるつみを
 をかしてかくかなしきめを見るらんちゝはゝにもあ
 ひみすかなしきめこのかほをもみてしぬへき事

となけく・君は御心をしつめてなにはかりのあ
 やまちにてかこのなきさにいのちをはきは
 めむとつようおほしなせといと物さはかしければ

3オ

色／＼のみてくらさゝけさせ給てすみよしの神
 ちかきさかひをしつめまもり給まことにあとを
 たれ給ふ神ならばたすけ給へとおほくの太
 願をたて給ふをの／＼みつからのいのちをはさる物
 にてかゝる御身の又なきれいにしつみ給ひぬへ
 き事のいみしうかなしきに心をおこしてすこし
 ものおほゆるかきりは身にかへてこの御身ひ
 とつをすくひたてまつらんとよみてもろこ系に
 仏神を念したてまつる・帝王のふかき宮に
 やしなはれ給て色／＼のたのしみにをこり給ひ

3ウ

しかとふかき御うつくしみおほやしにあまねく
 しつめるともからをこそおほくうかめ給しかいまなに
 のむくひにかこゝらよこさまなるなみ風にはお

ほゝれ給はん天地ことはり給へつみなくてつみに
あたりつかさくらぬをとられ家をはなれさかひを
さりてあけくれやすき空なくなけ給にか
くかなしきめをさへ見いのちつきなむとする
はさきの世のむくひかこの世のをかしかと神仏
あきらかにましまさはこのうれへやすめ給へ
とみやしろのかたにむきてさま／＼の願をたて

4才

給・またうみのなかの龍王よるつの神たち
に願をたてさせ給ふにいよ／＼なりとゝろき
ておはしますにつゝきたるらうにおちかゝりぬ
ほのほもえあかりて廊はやけぬこゝろた
ましめなくてはるかきりまとぶ・うしろのかたな
か^ゑおほいとのおほしきやにつつしたてまつ
りて上下となくたちこみていとらうかは
しくなきとよむこゑいかつちにもおとしす・空
はすみをすりたるやうにて日も暮にけり
やう／＼風なをり雨のあししめ^りちほしのひかり

4ウ

もみゆるにこのおまし所のいとめつらかなるも
いとかたしけなくてしむてんにかへしうつし
たてまつらんとするにやけのこりたるかたも
うとましけにそこ^ゑしの人のふみとゝろかしま
とへるにみすなともみなぶきちらしてけり
夜をあかしてこそはとたとりあへるに・君^は
御念誦したまひておほしめくらすにいとこゝ
ろあはたゝし月さしいてゝしほのちかくみち
きけるあともあらはになこりなをよせかへる
浪あらきをしはの戸をしあけてなかめおはしま

5才

す・ちかきせかいにものゝころをしりきしかた
ゆくさきの事うちおほえとやかくよとはか／＼
しうさとる人もなしあやしきあまともなどの
たかき人おはする所とてあつまりまいりて
きゝもしり給はぬ事ともをさへつりあへるもい
とめつらかなれとえをひもはらはす・このかせいま

しはしやまさましかはしほのほりてのこる所な
からまし神のたすけをろかならさりけりと

いふをきゝ給もいと心ほそしといへはをろかなり

うみにます神のたすけにかゝらすはしほの

5ウ

やほあひにさすらへなましひねもすにいりもみ
つる神のさはきにさこそいへいたうこうし給かた

しけなきおまし所なればたゝよりゐたまへ

るに故院たゝおはしましゝさまなからたち給

てなとかくあやしきところには物するそとて

御てをとりてひきたて給ふ住吉の神のみ

ちひき給まゝにはやふなてしてこのうらを

さりねとのたまはすいとつれしくて・かしこき

御かけにわかれたてまつりにしこなたさまく

かなしき事のみおほく侍れはいまはこのなき

6オ

身をやすて侍なましときこえたまへはいとあ
るましき事これはたゝいさゝかなるものゝむく

ひなりわれはくらゐにありしときあやまつ事
なかりしかとをのつからをかしありければそ
のつみををふるほといとまなくてこのよを

もかへりみさりつれといみしきつれへにしつ

むを見るにたへかたくてうみにいりなきさに

のほりいたくこうしにたれとかゝるついてに

内裏に奏すへき事あるによりなむいそ

きのほりぬるとて立さり給ぬあかすかなしくて

6ウ

御ともにまいりなとなきいり給て見あげ給へ

れは人もなく月のかほのみきらくとしてゆめ

の心ちもせず御けはひとまれる心ちして空

の雲あはれにたなひけり・としこる夢のうちに

も見たてまつらてこひしうおほつかなき御さ

まをほのかなるとさたかにみたてまつりつる

のみおもかけにおほえ給てわれかくかなしひ

をきはめいのちつきなんとしつるをたすけ

にかけり給へるとあはれにおほすにそかゝる

さはきもありけるとなこりたのもしううれしう

おほえ給ことかきりなし・むねつとふたかりて
中くなり御心まとひにうつゝのかなしき事

もうちわすれ夢にも御いじへをいますこし
きこえずなりぬる事といふせさに又や見え

るところさらにねいり給へとさらに御めもあ
はてあかつきかたになりにけり・なきさにち

いさやかなる舟よせて人二三人はかりこのたひ
の御やとりをさしてくなにひとならんとへは

あかしの浦よりさきのかみしほちの御ふねよそ
ひてまいれるなり・源少納言さふらひ給は

たいめんして事の心とり申さむといふ・よしきよあ

とるきて入道はかのくにのとくいにて年ころ

あひかたらひ侍つれとわたくしにいさゝかあひ

うらむる事侍てことなるせうそこをたにかよ

はさてひさしうなり侍ぬるをなみのまきれ

7
才

7
ウ

にいかなる事があらんとおほめく・君の御ゆめなど

もおほしあはする事もありてはやあへこのた

まへはふねにいきてあひたりさはかりはけし

かりつる かせにいつのまにかふなてしつらんと

心えかたく思へり・いぬるついたちの日のゆめ

にさまことなるものつけしらする事侍しかは

しんしかたき事とおもひ給へしかと十三日に

あらたなるしるしみせんふねをよそひまうけ

てかならず雨風やまはこのうらにをよせよとか

ねてしめす事の侍しかはこゝろみに舟よそひ

まうけてまち侍しにいかめしきあめ風いかつ

ちのおとろかし侍つれば人のみかとも夢を

しんしてくにをたすくたくひおほう侍ける

をもちひさせ給はぬまでもこのいましめの日を

すくさすこのよしをつけ申はへらんとて舟いたし

侍へるにあやしきかせほそうふきてこのうらに

8
才

8
ウ

つき待つる事まことに神のしるへたかはすなむ
こゝにももしろしめす事や侍つらんとてなん・い
とはゝかりおほく侍れとこのよし申給へと

いふ・よしきよしのひやかにつたへ申す君おほし
まはすに夢うつゝさま／＼しつかならすさとしの
やうなる事ともをきしかたゆくすゑおほし
あはせてよの人のきゝつたへんのちのそし
りもやすからざるへきをばゝかりてまことの
神のたすけにもあらんをそむく物ならは又こ

れよりまさりて人わらはれるめをや見ん・うつ
つの人の心たになをくるしはかなき事をも
かつゝみてわれよりよはひまさりもしはく
らゐたかく時代のよせいまひときはまさる人に
はなひきしたかひてその心むけをたとるへ
き物なりけり・そきてとかなしとこそむかしの
さかしき人もいひをきけれけふかくいのちをき
はめ世に又なきめのかきりを見つくしつさら

9
才

に後のあとのなをばふくともたけき事
もあらしゆめのうちにもちゝみかとの御をしへ

ありつればまたなに事をかうたかはむとお
ほして御返のたまふ・しらぬせかひにめつらし
きうれへのかきりみつれと宮このかたよりと
て事とひをこする人もなしたゝゆくゑなき
空の月日のひかりをふるとのともとなかめ侍に
うれしきつり舟をなんかのうらにしつやかに
かくるふへきくま侍りなんやとの給・かきりなく
よるこひかしこまり申す・ともあれかくもあれ夜
のあけはてぬさきに御舟にたてまつれと
れいのしたしきかきり四五人はかりしてたて

まつりぬれいのかせいてきてとふやうにあかし
につき給ぬたゝはひわたるほとはかた時のま
といへと猶あやしきまで見ゆる風の心な
り・はまのさまけにいとこゝろとなり人しけそ

9
ウ10
才

みゆるのみなん御心にそむきける入道のら
 ししめたるどころ／＼うみのつらにも山かく
 れにもとき／＼につけてけうをさかすへきなき
 さのとまやをこなひをして後の世の事を
 おもひすましつへき山みつのつらにかめし
 きたうをたてゝ三昧をよこなひこの世の

10
ウ

まつけに秋のたのみをかりおさめのこりのよは
 ひつむへきいねのくらまちともなとおり／＼
 所につけたるみどころありてしあつめた
 り・たかしほにおちてこのころむすめなどは
 かへのやとにうつしてすませければこのはま
 のたちには心やすくおはします・ふねより御車
 にたてまつりうつるほど日やう／＼さしあか
 りてほのかに見たてまつるよりおひわすれよは
 ひのふる心ちしてゑみさかえてまつ住吉の
 神をかつ／＼おかみたてまつる月日のひかり

11
オ

をてにえたてまつりたる心ちしていとなみ
 つかまつる事ことはりなり・所のさまをは
 さらにもしはすつくりなしたる心はえこちた
 ていしせんさいなどのありさまえいはぬいりえ
 の水なとゑにかゝはこゝろのいたりすくなからん
 ゑしはえかきをよふましと見ゆ・月ころの御す
 まゑよりはこよなくあきらかなつかし御
 しつらひなとえならすしてすまゑける
 さまなとけに宮このやんことなき所／＼に
 ことなしえんにまはゆきさまはまさりさま

11
ウ

にそみゆる・すこし御心しつまりては京の
 御ふみともきこえ給まいれりしかひは今は
 きみちにいてたちてかなしきめをみるとなき
 しつみてあのですまにとまりたるをめし
 て身にあまれる物ともおほく給てつかはす・
 むつましき御いのりの師ともさるへき所々
 にはこのほと御ありさまくはしくいひつかは

すへし・入道の宮はかりにはめつらかにてよみ
かへれるさまなときこえ給・二条院のあはれ
なりしほと御返はかきもやり給はすうち

12才

をきくをしのごひつゝきこえ給御けしきなをこ
となり返々いみしきめのかきりを見つくしはて
つるありさまなれはいまはとよをおもひはな
るゝ心のみまさり侍れとかゝみを見てもとの給
しおり影のはなるゝよなきをかくおほつか
なからとこゝらかなしきさまくのうれはしさはさし
をかれて

はるかにもおもひやるかなしらざりしうら
よりをちに浦つたひして夢のうちなる心地

のみしてさめはてぬほとはいかにひか事おほからん

12才

とけにそこはかとなくかきみたり給へるしもそ
いとみまほしきそはめなるをいとこよなき御
心さしのほと人々見たてまつるををのくぶる

さとに心ほそけなることつてすへかめり・をやみ
なかりし空のけしきなりなくすみわたりて
あさりするあまともほこらしけなり・すまはいと
心ほそくてあまのいはやもまねなりしを人しけ
きいとひはし給しかとこゝはまたさまことにあはれ
なることおほくてよろつにつにおほしなくさまる・あ
かしの入道をこなひつとめたるさまいみしう思

13才

すましたるをたゝこのむすめひとりをもてわつ
らひたるけしきいとかたはらいとききてきく
もらしうれへきこゆ・御心ちにもおかしときゝを
給し人なれはかくおほえなくてめくりをはした
るもさるへきちきりあるにやとおほしなかなを
かう身をしつめたるほどはおこなひよりほかの
ことはおもはし宮この人もたゝなるよりはいいひ
しにたかふとおほさんも心はつかしうおほさるれは
けしきたち給事なし・ことにふれど心はせあり
さまなへてならずもありけるかなとゆかしうお

ほされぬにしもあらず・こゝにはかしこまりてみつからもをさ／＼まいらす物へたゞりたるしものやにさふらぶさるはあけれ見たてまつらまほしうあかす思きこえていかで思こゝろをかなへんと仏神をいよ／＼念したてまつる・としは六十はかりになりたれといときよけにあらまほしうおこなひさらほひて人の程のあてはかなれはにやあらんうちひかみほれ／＼しき事はあれといにしへの物をも見しゆてもきたなからすよしつきたる事もましれゝいむかし物語なとせさせてきゝ給

14
才

にすこしつれ／＼のまきれなり・年比おほやけわたくし御いとまなくてさしもきゝをき給はぬよのふる事ともくつしいてゝきこゆかゝる所をも人をも見さらましかはさう／＼しくやとまてけうありとおほす事もましる・かうはなれきこゆれといとけたかう心はつかしき御ありさまにさこそ

13
ウ

いひしかつゝましうなりてわか思事は心のままゝにもえうちいてきこえぬを心もとなうくちおしとはゝ君といひあはせてななく・さうしみはをしなへての人たにめやすきはみえぬせかひに

14
ウ

世にはかゝる人もおはしけりと見たてまつしにつけて身のほとしられていとはるかにそ思きこえける・おやたちのかく思あつかふをきくにもにけなき事かなとおもふにたゞなるよりは物あはれなり・四月になりぬ衣かへの御さうそくみ帳のかたひらなとよしあるさまにしいつよろつにつかうまつりいとなむをいとおしうすゝるなりとおほせと人さまのあくまでおもひあかりたるさまのあてさにおほしゆるして見たまふ・京よりもうちしきりたる御とふ

15
才

らひとまたゆみなくおほかりのとやかなる夕月夜につみのうへくもりなくみえわたれるも

すみなれ給しふるさとのいけ水に思まかへら
れ給ふにいはんかたなくこひしき事いつかた
となくゆくゑなき心ちし給てたゝめのまへ
に見やらるゝはあはち島なりけりあはと
はるかになどの給て

あはと見るあはちのしまのあはれさへのこる
くまなくすめる夜の月ひさしうてふれ給
はぬ琴^{サシ}をふくろよりとりいて給てはかな^く

かきならし給へる御さまを見たてまつる人も
やすからすあはれにかなしう思あへりかづれ
うといふてをあるかきりひきすましたまへる
にかの岡へのいゑも松のひゝき浪のをとに
あひて心はせあるわか人は身にしみておもふ
へかめりなにともきゝわくまじきこのもかの
ものしはふるひとと^{ヒト}もゝすゝろはしくてはまかせ
をひきありく・入道もえたへて供養法た
ゆみていそきまいれり・さらにそむきにし世中も

15
ウ

とりかへし思いてぬへく侍りのちのよに^よ

ねかひ侍ところのありさまおもふたまへやらるゝ
よのさまかなとなくゝめてきこゆ・わか御こゝ
ろにもおりゝの御あそひその人かの人のこと
ふゑもしはこゑのいてしさまときとよにつけ
てよにめてられ給しありさまみかときよりはし
めたてまつりてもてかしつきあかめたて

まつり給しを人のうへもわか御身のありさま
もおほしいてられてゆめの心ちし給まゝに
かきならし給へる声も心すこきこゆ・ふる人
はなみたもとゝめあへすをかへに・ひはさうのこ

ととりによりて入道ひはのほうしになりてい
とおかしうめつらしきてひとつふたつひきいて
たりさうの御ことまいりたればすこしひき給
ふもさまゝいみしうのみ思きこえたり・いと
さしもきこえぬものゝねたにおりからこそはま

16
ウ16
オ

さる物なるをはるく／＼と物のと／＼こほりなき
うみつらなるになか／＼春秋の花もみちの
さかりなるよりはた／＼そこはかとなうしけ
れるかけともなまめかしきにくゐなのうちた／＼
きたるはたか門さしてとあはれにおほゆねも

いとなういつる事^{こと}ともをいとつかしうひ
きならしたるも御心とまりて・これは女の

なつかしきさまにてしとけなうひきたるこそ
おかしけれとおほかたにの給を入道はあひなく
うちゑみてあそはすよりなつかしきさまなるは
いつこのか侍らん^ににかし延喜の御てよりひき
つたへたる事^{こと}三代になんなり侍ぬるをかう

つたなき身にてこのよの事はすてわすれ

侍ぬるをも／＼せちにいふせきおり／＼はかき
ならし侍ぬるをあやしうまねふもの／＼侍こそ

しねんにかのせん大王の御てにかよひて侍れ山

17
才17
ウ

伏のひかみ／＼に松風をき／＼わたし侍にやあらん
いかてこれしのひてきこしめさせてしかなときこ
ゆるま／＼にうちわな／＼きてなみたおとすへか
めり・君ことをこと／＼もき／＼給ましかりけるあた
りにねたきわさかなとてをしやり給にあや
しうむかしよりしやうは女なんひきとる物なり
けるさかの御つたへにて女五宮さる世のなか
の上手にものし給けるその御すちにてとり
たて／＼つたふる人なしすへてた／＼いま世に

なをとれる人々かきなての心やりはかりにのみ
あるをこ／＼にかうひきこめ給へりけるいと
けうありけることかないかてかはきくへき
との給ふ・きこしめさむには何のは／＼かりかは侍ら
む御まへにめしてもあき人の中にてたにこ
そふる事き／＼はやす人は侍けれひわなむ
まことのねをひきしつむる人いにしへもかた
う侍しをおさ／＼と／＼こほる事なうなつかしき

18
才

てなとすちことになむいかてたとるにか侍らん
あらきなみのこゑにまじるはかなしくも思た

まへられなからかきつむるものなけかしさまきるゝ

おりゝもはへりなとすきぬたれはおかしとお
ほしてさうのこととりかへて給はせたりけにいと

すくしてかいひきたりいまの世にきこえぬす

ちひきつけて　つかひいといたうからめきゆの

ねふかうすましたりいせのうみならねときよ

きなきさにかひやひるはんなどこゑよき人に

うたはせて我もときゝ拍子とりて声うち

そへ給をこひきさしつゝめてきこゆ御くた物

なとめつらしきさまにてまいらせ人々にさけし

ゐそしなとしてをのつからものわすれしぬ

へきよのさまなり・いたくふけゆくまゝに涙かせ

すゝしうて月もいりかたになるまゝにすみま

さりてしつかなるほどに御ものかたりのこり

18
ウ19
オ

なくきこえてこのうらにすみはしめしほとの心

つかひのちの世をつとむるさまかきくつしき

こえてこのむすめ。　ありさまとはすかたりにきこゆ

おかしきものゝさすかにあはれときゝ給ふしも

あり・いとゝり申かたき事なれと我君かう

おほえなきせかひにかりにてもうつるひお

はしましたるはもし年ころ老法師のいのり

申侍る神仏のあはれひおはしましてしはし

のほと御こゝろをもなやましたてまつるにや

となんおもふ給ふるそのゆへは佳吉の神をた

のみはしめたてまつりてこの十八年になり

侍ぬめのわらはのいときなう侍しよりおもふ

心侍てとしことの春秋ことになからすかのみや

しろにまいる事なむ侍ひるよるの六時のつと

めにみつからはちすのうへのねかひをはさる

物にてたゝこの人をたかきほいかなへたまへと

19
ウ20
オ

なん念し侍さきの世のちきりつたなくてこそ
 かくくちおしき山かつとなり侍けめおや大
 臣のくらゐをたち給へりきみつからかく
 ゐなかのたみとなりにてはへりつき／＼さのみ
 おとりまかしはなにの身にかなりはへらんとかな
 しくおもひ侍るをこれはむまれし時よりの
 のむところなむ侍いかにして宮このたかき人
 にたてまつらむとおもふ心ふかきによりほと／＼
 につけてあまたの人のそねみをおひみのた
 めかしきめを見るおり／＼もおほく侍れとさらに

20
ウ

くるしみとおもひ侍らすいのちのかきりはせ
 はきころもにもはく／＼み侍ならなくくならみ
 すて侍るはなみのなかにもまし／＼つせねとなん
 をきて侍なとすへてまねふへくもあらぬ
 事ともをうちなき／＼きこゆ・君もものをさま／＼
 おほしつゝくるおりからはうちなみたくみつゝ
 きこしめすよこさまのつみにあたりて思かけて

せかひにたゝよふもなにのつみにかとおほ
 つがなくおもひつるを今夜の御物かたりに
 きゝあはすればけにあさからぬさきの世のちき

21
オ

りにこそいとあはれになんとかはかくさたか
 におもひしり給けるをいま／＼てはつけ給はさり
 つらん宮こはなれしときより世のつねなき
 もあちきなうおこなひよりほかの事なくて
 月日をふるに心もみなくつをれにけりかゝる人
 ものし給とはほのきゝなからいたつら人をは
 ゆゝしき物にこそおもひすて給ふらめとおも
 ひくつしつるをさらはみちひき給へきにこそ
 あるれほそきひとりねのなくさめにもなどの
 給をかきりなくつれしとおもへり

21
ウ

ひとりねは君もしりぬやつれ／＼とおもひ
 あかしのうらさひしさをまして年月おもひ給へ
 わたるいふせさをしはからせ給へときこゆるけ

はひうちわなゝきたれとさすかにゆへなからず・
されとうらなれ給へらん人はとて

たひころもうらかなしさにあしかね草の
まくらは夢もむすはすとうちみたれたまへる
御ありさまはいとそあいきやうつきいふよし
なき御けはひなる・かすしらぬ事とききこえ
つくしたれとつるさしやひかことにもかきな

22
才

たれはいとゝおこにかたくなしき入道の心はへ
もあらはれぬへかめり・思事かつゝかなひ
ぬる心ちしてすゝしうおもひゐたるに又の日
のひるつかたをかへに御文つかはす心はつかしき
さまなめる○^もなかゝゝかゝるものゝくまにそおもひ
のほかなる事もこもるへかめると心つかひし給
ひてこまのくるみいろの紙にえならすひきつ
くるひて

をちこち^{のモ}しらぬ雲井になかめわひかすめし
やとの木すゑをそとふおもふにはとはかりやあり

けむ入道も人しれすまぢきこゆとてかのいゑ
にきゑたりけるもしるければ御つかひいとまは
ゆきまてゑはす御返いとひさしうちにいりて
そゝのかせとむすめはさらにきかすいとはつかし
けなる御ふみのさまにさしいてんでつきもはつ
かしうつゝましう人の御ほとわか身のほとおもふ
にこよなくて心ちあしとてよりふしぬいひわひて
入道そかく・いとかしこきはゐなかつて侍たもと
につゝみあまりぬるにやさらに見給へもをよひ
侍らぬかしこきになんさるは

23
才

なかむらんおなし雲井をなかむるはおもひも
おなしおもひなるらんなむ見給ふるいとすき
すき^しやときこえたりみちのくにかみにいた
うふるめきたれとかきさまよしはみたりけに
もすきたるかなとめさましう見給御つかひに
なへてならぬ玉もなかつけたり又の日せ

22
ウ

むしかきは見しらすなんとて

いふせくも心に物をなやむかなやよいかに
とどふ人もなみとこのたひはいといたうなよ
ひたるうすやうにいとつくしけにかき給へ

23
ウ

りわかき人のめてさらんもいとあまりむまれ
いたからんめてたしとみれとなすらひならぬ身の
ほとのみしつかひなければなか／＼よにある
物とたつねしり給につけてなみたくまれてさ
らにれいのとうなきをせめていはれてあさが
らすしめたるむらさきの紙にすみつきこく
うすくまきはして

おもふらん心のほとややよいかにまたみぬ人
のき／＼かなやまむてのさまかきたるさまなとや
むことなき人にいたうおとるましう上手め

24
オ

きたり京の事おほえてをかしと見給へとう
ちしきりてつかはさむも人めつゝましければ

二三田へたてつゝつれ／＼なるたくれもしは物
あはれなるあけほのなとやうにまきはしてお
り／＼人もおなし心に見しりぬへきほとをし
はかりてかきかはし給ににけなからす心ふかうおも
ひあかりたるけしきもみてはやましとおほ
す物からよしきよからうしていひしけしき
もめさましうとしころ心つけてあらんをめの
まへにおもひたかへん^もいとおしうおほしめくら

24
ウ

されて人すゝみまいらはさるかたにてもまきは
はしてんとおほせと女はた中／＼やん事
なき／＼はの人よりもいたう思あかりてねたけ
にもてなしきこえたれは心くらへにてそす
すきける・京の事をかくを^せきへたゝりてはい
よ／＼おほつかなくおもひきこえ給ていかにせ
ましたはふれにくゝもあるかなしのひてやむ
かへたてまつりてましとおほしよはるおり／＼
あれとさりとまかくてやはとしをかさねんいま

さらに人わるきことをはとおほししつめたり・そ

のとしおほやけにものゝさとししきりて物さは

かしき事おほかり三月十三日かみなりひらめ

き雨風さはかしき夜みかとの御夢に院の

御門おまへのみはしのもとにたゝせたまひて

御けしきいとあしうてにし^みきこえさせ給を

かしこまりておはしますきこえさせ給事とも

おほかり源氏の御事なりけんかし^いとおそ^い

ろしういとおしとおほしてきさきにきこえさ

せ給ければあめなとふり空みたれたる夜

は思なしなる事はさそ侍かる^くしきやうにおほ

しおとろくましき事ときこえ給にらみ給し

に見あはせ給とみしけにや御めにわつらひ給

てたへかたうなやみ給御つゝしみ内にも宮にも

かきりなくせさせ給おほきおとゝうせ給ぬこと

はりの御よはひなれとつきゝにをのつからさは

25
才25
才

かしき事あるに大宮もそこはかとなつわつら

ひ給てほとふれはよはり給やうなるうちにおほ

しなけく事さまゝなり猶この源氏の君ま

ことにをかしなきにてかくしつむならはかなら

すこのむくひありなんとなんおほえ侍いまは

なをもとのくらぬをも給ひてんとたひゝおほし[。]

給を世のときかるゝしきやうな[。]へしつみに

おちて宮こをさりし人を三年をたにすくさす

ゆるされん事はよのひとみかいひつたへ侍らん

なときさきかたくいさめ給におほしはゝかるほと

に月日かさなりて御なやみともさまゝにおもりま

さらせ給・あかしにはれいのあきははま風のことなる

にひとりねもまめやかに物わひしうて入道にも

おりゝかたらはせ給とかくまきはしてこちまいら

せよとの給てわたり給はん事をはあかましうおほ

したるをさうしみはたさらにおもひたつたへく

26
才26
才

もあらずいとくちおしきゝはのぬ中人こそかり
 にくたりたる人のうちとけ事につきてさやつ
 にかるらかにかたらふわさをもすなれ人かすにも
 おほされさらん物ゆへわれはいみじきものお
 もひをやそへんかくをよひなき心をおもへる
 おやたちもよこもりてすすとし月こそあい
 なたのみにゆくすゑにくゝおもふらめ中くゝなる
 こゝろをやつくさむと思てたゝこのつらにをは
 せんほとかゝる御ふみはかりをきこえかはさむこそ
 をろかならねとしころをとにのみきゝていつれはさる
 人の御ありさまをほのかにもみたてまつらんなど
 はるかに思きこえしをかく思ひかけさりし御す
 まひにてまほならねとほのかにもみたてまつり
 よになき物ときゝつたへし御ことのねをもかせに
 つけてきゝあけくれの御ありさまおほつかながら
 かくまでよにある物とおほしたつめるなとこそ
 かゝるあまのなかに朽ぬる身にあまる事なれなと

27
才

おもふにいよゝはつかしうてつゆもけちかき事は
 おもひよらすおやたちはこゝらのとしころのいのり
 のかなふへきを思なからゆくりかに見せたて
 まつりておほしかすまへさんときいかなるなけ
 きをかせんとおもひやるにゆゝしくてめてたき
 人ときこゆともつらういみじもあるへきかな
 めに見えぬ仏神をたのみたてまつり人の御
 心をもすくせをもしらてなとうちかへしおもひ
 みたれたり・君はこのころのなみのおとにかの物
 のねをきかはやさらすはかひなくこそなとつねは
 のたまふしのひてよろしき日みてはゝ君のと
 かくおもひわつらぶをきゝいれす弟子ともなと
 たにしらせす心ひとつにたちぬかゝやくはかりし
 つらひて十二三日の月のはなやかにさしいてた
 るにたゝあたら夜るときこえたり君はすきの
 さまやとおほせと御なをしたてまつりひきつ

27
ウ28
才

くるひて夜ふかしていて給御くるまはになくつくりたれと所せしとて御馬にていて給これみつなとはかりをさふらはせ給やゝとをくいる所なりけりみちのほともよものうらゝみわたし給て思とち見まほしきいりえの月かけにもまつ恋しき人の御事を思いてきこえ給にやかて馬ひきす

きてをもむきぬへくおほす

28
ウ

秋の夜のつきけのこまよ我こふる雲井を
かけれ時のまもみんとうちひとこたれ給ふつくる
るさまこふかくいたき所まさりて見ところある
すまぬなり海のつらはいかめしうおもしらくこれ
は心ほそくすみたるさまこゝにゐて思のこす事
はあらしとすむらんとおほしやらるゝに物あはれなり
三昧堂ちかくてかねのこ氣松の風にひゝきあ
ひて物かなしう岩におひたる松のねさしも
心はえあるさまなり前裁ともむしのこ氣を

29
オ

つくしたりこゝかしこのありさきなと御覽すむす
めすませたるかたはこゝろことにみかきて月いれた
るまきの戸くちけしきことにをしあげたりう
ちやすらひなにかとのたまふにもかうまては
みえたてまつらしとふかうおもふに物なけかし
うてうちとけぬ心さまをこよなうも人めきた
るかなさしもあるましきゝはの人たにかはかり
いひよりぬれは心つようしもあらずならひた
りしをいとかくやつれたるにあなつらはしきに
やとねたうさまゝにおほしなやめりなさけな
うをしたゝんもことのさまにたかへり心くらへに
まけんこそ人わるけれなとみたれつらみ給さま
けに物おもひしらんにこそみせまほしけれちかき
木帳のひもにさつの琴のひきならされたる
もけはひしとけなくうちとけなからかきまさく
りけるほとみえておかしければこのきゝなら
したる事ことをさへやなとよろつにのたまふ

29
ウ

むつことをかたりあはせん人もかなつき世の夢
もなかはさむやと

あけぬ夜にやかてまとへる心にはいつれをゆめと

わきてかたらむほのかなるけはひ伊勢の宮す

所にいとようおほえたりなにこゝろもなぐうち

とけてゐたりけるをかう物おほえぬにいとわり

なくてけちかかりけるさつしのうちにいりてい

かてかためけるにかいとつよきをしめてもを

したち給はぬさまなりされとさのみもいかてかあ

らん人さまいとあてにそひえて心はつかしきけはひ

そしたるかうあなかなりけるちきりをおほ

すにもあさからすあはれなり御心さしのちかまさ

りするなるへしつねはいとはしきよのなかさもと

くあけぬる心ちすれは人にしられしとおほす

も心あはたゝしうてこまかにかたらひをきていて

給ぬ御ふみいとしのひてそけふはあるあいなき

30
才

30
ウ

御心のおになりやこゝにもかゝる事いかてもらさし

とつゝみて御つかひことゝしうもてなさぬを

おもへりかくて後はしのひつゝときゝおはすほ

ともすこしはなれたるにをのつから物いひさかなき

あまのこもやたちましろとおほしはゝかるほ

とをされはよとおもひなけきたるをけにいしか

ならんと入道も極楽のねかひをはわすれてたゝ

この御けしきをまつことにはすいまさらに心を見

たるもいとゝおしけなり・二条の君のかせのつ

てにてももりきゝ給はん事はたはふれにて

もこゝろのへたてありけるとおもひうとまれ

たてまつらんは心くるしうはつかしうおほさるゝも

あなかななる御心さしのほとなりかしかゝるかた

の事をはさすかに心とゝめてうらみ給へりし

おりゝなとてあやなきささひことにつけても

さ思はれたてまつりけむなとゝりかへさまほ

しう人のあり様をみ給につけてもこひしきの

31
才

なくさむかたなければいよりも御ふみこまや
かにかき給ておくに・まことや我ながら心よりほか
なるなをさり事にてうとまれたてまつりしふ

し／＼を思いつるさへむねいたきに又あやしう物
はかなきゆめをこそみ侍しかかうきこゆるとはす
かたりにへたてなき心のほとはおほしあはせよち
かひし事もなとかきてなにしてつけても

しほ／＼とまつそなかるゝかりそめのみるめはあま
のすさひなれともとある御返なに心なくらう

たけにかきてはてにしのひかねたる御ゆめかたり

につけてもおもひあはせらるゝ事おほかるを

うらなくもおもひけるかなきりしをまつ
よりなみはこえし物そとおひらかなる物からたゝ
ならすかすめたまへるをいとあはれにうち

をきかたく見給てなこりひさしうしのひの旅ね
もし給はす・女おもひしるきにいまそまこと

31
ウ32
オ

に身もなけつへき心ちするゆくすゑみしかけ
なるおやはかりをたのもしき物にていつの世に
人なみ／＼になるへき身とはおもはさりしかとたゝ
そこはかとなくてすくしつる年月はなに事をか

心をもなやましけむかういみしう物おもはしき
よにこそありけれとかねてをしはかりおもひしより
もよるつにかなしけれとなたらかにもてなして

にくからぬさまにみえたてまつるあはれとは月日
にそへておほしませとやんことなきかたのおほ
つかなくて年月をすくし給かたゝならすうちおもひ
をこそせ給らんかいと心くるしければひとりふしかち
にてすくし給・束えをさま／＼かきあつめておも

ふ事とををかきつけかへり事きくへきさまに
しなし給へりみむ人の心にしみぬへき物のさ

まなりいかてか空にかよふ御心ならん二条の君も
物あはれになくさむかたなくおほえ給おり／＼お

32
ウ33
オ

なしやうに糸をかきあつめ給つゝやかてわか御あ記
 りさま日記^記のやうにかき給へりいかなるへき御
 さまともにかあらん・としかはりぬうちに御くすりの
 事ありて世の中さま／＼にのゝしるたうたいの
 みこは右大臣の御むすめ承香殿の女御の御
 はし^らにおとこみこむまれ給へる二になり給へは
 いといはけなし春宮にこそはゆつ^つ行きこえ給
 はめおほやけの御うしろみをし世をまつりこつ

へき人をおほしめくらすにこの源氏のかくし
 つみ給事いとあたらしうあるましき事なれば
 ついにきさきの御いさめをもそむきてゆるされ
 給ふへきさためいてきぬ・こそよりきさきも御も
 のゝけになやみ給ひさま／＼のもののさとしき
 りさはかしきをいみしき御つゝしみとをした
 まふしるしにやよろしうおはしましける御めのな
 やみさへこのころをもくならせ給て物こゝろほ
 そく^{おほ}されければ七月廿日^{あは}のほとにまたかさね

33
ウ

て京へかへらせ給へき宣旨^{きぎ}きたるついの

事とおもひしかとよのつねなきにつけてもい
 かななりはつへきにかとなけき給をかうには
 かなれはうれしきにそへてもまたこのうらを
 いまはとおもひはなれんことをおほしなけくに入
 道さるへき事とおもひなからうちきくよりむね
 ふたかりておほゆれと思ひの事^{こと}さもえ^か給
 はゝこそはわかおもひのかなふにはあらめなとお
 もひなをす・そのころは夜かれなくかたらひた
 まふ六月はかりより心くるしきけしきありて
 なやみけりかくわかれ給へきほとなればあや
 にくなるにやありけむありしよりもあはれに
 おほしてあやしう物思ふへき身にもありけるかな
 とおほしみたる女はさらにもいはす思しつみたり
 いとことほりやおもひのほかにかなしき道に
 いてたち給しかとついにはゆきめくりきなんと

34
ウ34
オ

かつはおほしくさめきこのたひはうれしき
 かたの御いてたちの又やはかへりみるへきとお
 ぼすにあはれなり・さふらふ人々^も ほと／＼につけて
 はよろこひ思ひ京よりも御むかへに人々まいり
 心ちよけなるをあるしの入道なみたにくれて

月もたちぬほどさへあはれなる空のけしき

になそや心つからいまもむかしもすゝるなること
 にて身をはふしかすらむとさま／＼におほしみ
 たれたるを心しれる人々はあなにくれいの御く
 せそとみたてまつりむつかるめり月ころはつゆ人
 にけしきみせず時々はひまきれなし給つる

つれなさをこのころあやになか／＼の人の心
 つくしにとつきしろふ・少約言のしるへしてきこ
 えいてしはしめの事などさゝめきあへるをたゝ
 ならすおもへり・あさて斗になりてれいのやうに

いたつもふかさてわたり給へりさやかにもまたみ

35
才35
ウ

たはぬかたちなといとよし／＼うづた^マたかきさま
 してめさましうもありけるかなとみすてかたく
 くちおしうおほさるさるへきさまにてむかへむと
 おほしたりぬさやうにそかたらひなくさめ
 たまふおとこの御かたちありさまはたさらにも
 いはすとしころの御をこなひにいたくおもやせ給
 へるしもいふかたなくめてたき御ありさま

にて心くるしけなるけしきにうちなみたくみ

つゝあはれふかくちきり給へるはたゝかはりをさ

いはひにてもなとかやまさらんとまてそ見ゆめれ
 とめてたきにしもわか身のほとをおもふにもつき
 せず・なみのこ氣秋の風にはなをひゝきことな
 りしほやくけふりかすかにたなひきてとりあ
 つめたる所のさまなり

このたひはたちわかるとももしほやく煙は
 おなしか^タたになひかんとのたまへは

かきつめてあまのたくものおもひにも今はかひ

36
才

なきうらみたにせしあはれにうちなきて事す

くなゝる物からさるへきふしの御いらへなとあさ

36
ウ

からすきこゆ・このつねにゆかしかり給ものゝね

なとさらにきかたてまつらざりつるをいみし

うつらみ給ふさらはかたみにししのふばかりのひ

とことをたにとの給て京よりもおはしま

したりし琴^サの御こととりにつかはして心こと

なるしらへをほのかにかきならし給へるふかき夜

のすめるにはたとへんかたなし入道えたへてし

やつこととりてさしいれたりみつからもいとゝなみた

さへそゝのかされてとゝむへきかたなきにさそはるゝ

なるへししのひやかにしらへたるほといと上手

37
オ

めきたり入道の宮の御ことのねをたゝいまのまた

なき物におもひきこえたるはいまめかしうあな

めてたととき人の心ゆきてかたちさへおもひ

やらるゝ事はけにいとかきりなき御ことのねなり

これはあくまでひきすまし心にくゝねたきねそま

れるこの御心^{ココロ}にたにはしめてあはれになつかしふまた

みゝなれ給はぬてなと心やましきほとにひき

さしつゝあかすおほさるゝにも月こるなとしめて

もきゝならさゝりつらんとくやしうおほさる心の

かきりゆくさきのちきりをのみしたまふ琴^サは

37
ウ

またかきあはするまでのかたみにとのたまふ女

なをさらにたのめをくめるひとことをつき

せぬねにやかけてしのはむいふともなきくちす

さひをうらみたまひて

達までのかたみにちぎる中のをのしらへは

ことにかはらさるゝんこのねたかはぬさぎにかならずあ

ひみんとたのめ給めりされとたゝわかれむほと

のわりなさを思むせたるもいとことほりなり・

たちたまふあかつきは夜ふかくいて給て御むかへ

の人々もさはしければ心も空なれと人^{ヒト}をはからひて

38
オ

うちすてゝたつもかなしきうらなみの名残いか
にとおもひやるかな御返り

年へつるとまやもあれてうきなみのかへるかた
にや身をたくへましとうち思けるまゝなるを

見給にしのひ給へとほろ／＼とこほれぬ心しら

ぬひと／＼はなをかゝる御すまぬなれと年ころと

いふはかりなれたまへるをいまはとおほすはさも

ある事そかしなと見たてまつるよきよなと

はをろかならずおほすなめりかしとにくゝそおもふ・

うれしきにもけにけふをかきりにこのなきさを

38
ウ

わかるゝ事なとあはれかりてくち／＼しほたれい

ひあへる事ともあめりされとなにかはとてなむ

入道けふの御まつけいといかめしうつかうまつれり

人々しものしなまてたひの装束めつらしきさま

なりいつのまにかしあへけむと見えたり御

よそひはいふへくもあらずみそひつあまたかけ

さふしはすまことの宮このつとにしつへき御を

くり物ともゆへつきておもひよらぬくまなしけふ
たてまつるへきかりの御装束に

よるなみにたちかさねたる旅ころもしほとけ

しとや人のいとはむとあるを御らんしつけてきは
かしけれは

かたみにそかふへかりける逢ことの日かす

へたてんなかの衣をとて心さしあるをとてたてま

つりかふ御身になれたるともをつかはすけにいま

ひとへしのはれ給へき事をそふるかたみなめり

えならぬ御そにゝほひのうつりたるをいかゝ人

の心にもしめさらん・入道いまはと世をはなれ侍

にし身なれともけふの御をくりにつかふまつらぬ

ことなと申てかひをつくるもいとおしなからわか

き人はわらひぬへし

よをうみにこゝらししむ身となりてなを

このきしをえこそはなれね心のやみはいとゝまと

39
ウ

39
オ

ひぬへく侍れはさかひまでたにときこえてす
 きくしきさまなれとおほしいてさせ給あり侍^ら
 はなと御けしき給はる・いみしう物をあはれと
 おほしてところくうちあかみ給へる御まみのわたり
 なといはむかたなくみえ給思すてかたきすち
 もあめれはいまいとくみなをし給てんたこの
 すみかこそみすてかたけいかくすへきとて

宮こいてし春のなけきにおとらめや年ふる

うらをわかれぬる秋とてをしのかひ給へるにいとく

物おほえすしほたれまさるたちぬもあさまし

うよるほふ・さうしみの心ちたとふへきかたなく

てかうしも人に見えしと思しつむれと身のつき

をもとにてわりなき事なれとうちすて給へ

るうらみのやるかたなきにおも影そひてわすれ

かたきにたけき事とはたくなみたにしつめり・

はく君もなくさめわひてなにくかく心つくし

なる事を思そめけむすへてひかくしき人

40
才

にしたかひける心のおこたりそといふ・あなかまやお
 ほしすつましき事も物したまふめれはさりともおほ
 すところあらんおもひなくさめて御ゆなとをたに
 まいれあなゆしやとてかたすみによりぬたりめの
 とはく君なとひかめるころをいひあはせついつ
 しかいかておもふさまにてみたてまつらんと年月
 をたのみすくしいまやおもひかなふと^{こそ}ちたのみきこ
 えつれ心くるしき事をも物のはしめにみるかな
 となけくを見るにもいとおしければいとほけ
 られてひるは日ひとひいをのみねくらしよるはすく

41
才

よかにおきぬてすのゆくゑもしらすなりにけりと
 てををしりてあぶきぬたり弟子とともにあはめら
 れて月夜にいて行道する物はやり水にたう
 れいりにけりよしある岩のかたそはにこしもつき
 そこなひてやみふしたるほとになんすこし物
 まきれける・君はなにはのかたに渡りて御はし^ら

40
ウ

へし給て住吉にもたいらかにて色／＼の願はた
しまつすへきよし御つかひして申させ給にはかに
所せうてみつからはこのたひえまつて給はすこと
なる御せうえうなとなくていそきいり給ぬ・二条

院におはしましつきて宮この人も御ともの人もゆ
めの心ちしてゆきあひよろこひなきもゆゝしきま
てたちさはきたり女君もかひなき物におほし

すてつるいのちうれしうおほさるらんかしいとう
つくしけにねひとゝのほりて御物おもひのまことと
ころをかりし御くしのすこしへかれたるしもいみ
しうめてたきをいまはかくて見るへきそかしと
御心おちあるにつけてはまたかのおかすわかれし
人のおもへりしさま心くるしうおほしやらるなを
よとゝもにかゝるかたにて御心のいとまそなきや・

その人の事ともなときこえてたまへりおほし
いてたる御けしきあさからす見ゆるをたゝなら

41
ウ42
オ

すや見たてまつり給ふらんわさとならず身

をはおもはずなとほのめかし給そをかしつらう

たくおもひきこえ給かつみる たにあかね御さまを

いかてかへたてつる年月そとあさましきまで

おもほすにとりかへし世中もいとつらめしう

なん・ほともなくもとの御くらゐあらたまりてかすよ

りほかの権大納言になり給つき／＼の人もさるへ

きかきりはもとのつかさへし給よにゆるさるゝほと

かれたりし木の春にあへるこゝちしていとめて

たけなり・めしありてうちにまいり給あまへ さふ

らひ給にねひまさりていかてさる物むつかしきすま

ゐに年へたまひつらんと見たてまつる女房な

との院の御時よりさふらひておいしらへるともはかな

しくていまさら なきさはきめてきこゆつへもはつ

かしうさへおほしめされて御よそひなとことにひき

つくるひていておはします御こゝちれいならて日ころ

へさせたまひければいたうおとろへさせ給へる

42
ウ

をきのふけふすすこしよろしうおほされける御物

43
才

かたりしめやかにありて夜にいりぬ十五夜の月おも
しろうつかなるにむかしの事がきくつしおほし
いてられてしほたれさせ給ふもの心ほそくおほさるゝ
なるへしあそひなともせずむかしきゝしものゝね
なともきかてひさしうなりにけるかなとの給はするに
わたつづみにしつみづらふれひるのこのあしたゝ
さりし年はへにけりときこえたまへはいとあは
れにこゝろはつかしうおほされて

宮はしらめくりあひける時しあればわかれし
はるのうらみのちすなといとなまめかしき御あり

43
ウ

さまなり・院の御ためには八講おこなはるへき事
まついそかせ給春宮を見たてまつり給にこよなく
およすけさせ給てめつらしうおほしよろこひたる
をかきりなくあはれと見たてまつり給ふ御さえ
もこよなくささらせ給てよをたまたせ給はんにはゝ

かりあるましくかしこくみえさせたまふ・入道^① 宮にも
御心すこししつめて御たいめんのほにもあはれな
る事ともあらんかし・まことやかのあかしにはかへる浪に
つけて御ふみつかはすひきかくしてこまやかにかき
給めりなみのよるくゝいかに

44
才

なけきつゝあかしのうらに朝霧のたつやと人
をおもひやるかな・かの帥のむすめの五節あひな
く人しれぬ物おもひさめぬる心ちしてまくなき
つくらせてさしをかせけり

すまの浦にこゝろをよせし舟人のやかてくた
せる袖を見せはやてなとこよなくまさりにけり
と見おほせ給てつかはす

かへりてはかことやせましよせたりしなこりに
そてのひかたかりしをあかすをかしとおほしし名
残なれはおとろかされ給ていとゝおほしいつれと

このころはさやうの御ふるまひさらにつゝみ給

44
ウ

ふめり花ちるさとなにもたゞ御せうそこはかり
にておほつかなく・なか／＼うらめしけなり



(みをつくし)

さやかに見え給し夢のゝちは院のみかとの御事を心にかけきこえ給ていかてかのしつみ給らんつみすくひたてまつる事をせんとおほしなけけるをかくかへり給ひてはその御いそぎし給神な月に御八講し

給世の人なひきつかうまつる事むかしのやつなり・おほきさきなを御なやみをくおはしますうちにもつゐにこの人をえけたすなりぬる事と心や みおほしけれとみかとは院の御ゆいこんをおもひきこえ給もの

のむくひありぬへくおほしけるをなをし
たて給ひて御心ちすゝしくなんおほし
ける時くおこりなやませ給し御めもさは
やき給ぬれとおほかたよにえなかくあ

1才

るましう心ほそき事とのみひさしからぬ事

をおほしつゝつねにめしありて源氏の君

はまいり給世中の事なともへたてなくの

給はせなとしつゝ御ほいのやうなれはおほかた

のよの人あいななくうれしきことによるこひ

きこえける・おりあなんの御心つかひちかく

なりぬるにもないしのかみ の心ほそけに世を

おもひなけき給へるいとあはれにおほさ

れけりおとゝうせ給ふ大宮もたのもしけ

なくのみあつい給へるに我よのこりすく

なき心ちするになんいとくおしうなこりな

きさまにてとまり給はんとすらんむかしより

人にはおもひおとし給へれとみつからの心さし

の又なきならひにたゝ御事のみなむあは

れにおほえけるたちまさる人 又ほいありて

見給ふどもをろかなぬ心さしはしもなすら へ

1ウ

2才

はさらんと思さへこそくるしけれとてうちなき
給ぬ・女君かほはいとあさやかにほひてこほ
るはかりのあひきやうにてなみたもこほれ
ぬるをよろつのつみ忘れてあはれにらうた
しと御らんせらるなとかみこをたにもたま
へるましきくちおしくもあるかなちきりふか
き人のためにはいま見いて給てんとおもふも
くちおしくやかきりあればたゝ人にてそみ
給はんかしなと行末の事をさへ給はする
にいとつかしうもかなしうもおほえ給御かたち
なとなまめかしうきよらにてかきりなき御心
さしの年月にそふやうにもてなさせ給にめ
てたき人なれとさしもおもひへらさりし
けしき心はへなと物おもひしられ給まゝに
なとて我こゝろのわかくいはけなきにまかせ
てさるさはきをさへひきいてゝわか名をはさ
らにもいはす人のさためさへなとおほしい

2
ウ

さらきに春宮の御元服の事あり十一に成給へとほとよりおほきにおとなしうきよらにてたゞ源氏の大納言の御かほをふたつにうつしたらむやうにみえ給いとまはゆきまでひかりあひ給へるを世人めてたきものにきこゆれとはゝ宮はいみしうかたはらいたき事にあいなく御心をつくし給うちにもめてたしとみたてまつり給て世中ゆつりきこえ しらせ給ふにゆつりきこえ しらせ給ゝおなし月の廿日御くにゆつりの事にはかなれはおほきさきおほしあはてたりかひなきさまなからものとかに御らんせらるへき事を思ふなりとそきこえなくさめ給ける・はうには承香殿のみこみ給め世中あらたまりてひきかへいめかしき事ともおほかり

3才

3
ウ

源氏の大納言内大臣になり給ぬかすさま
まりてくつろく所もなかりければくはゝ
り給なりけりやかて世のまつりことをし
給へきなれとさやうの事しけきそくにはた
へすなんとてちしのおとゝせつしやうし給へ
きよしゆつりきこえ給やまひによりて
くらぬもかへしたてまつりしをいよ／＼お

4才

いのつもり・そひてさかしき事侍らしとつけひき
申給はす人の国にもことうつり世中さた
まらぬおりは深き山にあとをたえたる人
たにもおさまれる世にはしおかみもはち
すいてつかへけるをこそまことのひしりには
しけれやまひにしつみてかへし申給けるく
らぬを世中かはりて又あらため給はんにさら
にとかあるまじうおほやけたくしさをためら
ざるためしもありければすまひはて給は
て太政大臣になり給御年も六十三にそなり

給世中すさまじきによりかつはこもりぬ給
しをとりかへしはなやき給へは御こともなと
しつむやうにものし給へるをみなうかひ
給取わきて宰相中将権中納言になり

給かの四君の御はらのひめ君十二になり給を
内にまいらせんとかしつき給かのたかさこうたひ
し君もかうふりせさせていとおもふさまな

りはら／＼に御こともいとあまたつき／＼にお
いゝてつゝにきはゝしけなるを源氏のおとゝは
うらやみ給・大殿はらのわか君人よりことにうつ

5才

くしうて内東宮の殿上し給こひめ君のうせ
給しなけきを宮おとゝ又さらにあらためて
おほしなけくされとおはせぬなりもたゝこのお
とゝの御ひかりによるつもてなされ給て年こ
ろおほししつみつるなこりなきまでさかへ
たまふなをむかしに御心はへかはらすおりふしこ

4ウ

とにわたり給なとしつゝわか君の御めのとたち
 さらぬ人々もところのほとまかてちらさり
 けるはみなさるへき事にふれつゝよすかつ
 けん事をおほし^きせきつるに^さいはひ人おほく

5ウ

なり^侍ぬへし・二条院にもおなしことまちきこえ
 ける人をおはれる物におほしてところ
 のむねあくはかりとおほせは中将中務やうの
 人々にはほと／＼につけつゝなさけを見え
 給に御いとまなくてほかありきもし給は

す・二条院のひんかしなる宮院の御せうぶん
 なりしをになくあらためつくらせ給花ちる
 さとなとやうの心くるしき人々すませんと
 おほしあてゝつくるはせ給ふ・まことやかのあか
 しに心くるしけなりし事いかにとおほし忘るゝ

6オ

ときなけれとおほや^{わたしい}けわたくしいそかしきま
 きれにえ^えおほすまゝにもとふらひ給はさり

けるを三月ついたちのほとこのころやと

おほしやるに人しれすあはれにて御つかひ
 ありとくかへりまいりて十六日になん女に
 てたいらかにものし給とつけきこゆめつらし
 きさまにてさへあなるをおほすにをるかなら
 すなとて京にむかへてかゝる事をもせさせ
 さりけんとくちおしうおほさるすくえうに
 御こ三人みかときさきかならずならひてむまれ

6ウ

給へし中のおとりは太政大臣にてくらゐをき
 はむへしとかんかへ申たりし中のおとりは
 らに女はいてきたまふへしとありし事さ
 してかなふなめりおほかたかみなきくらゐ
 にのほり世をまつりこち給へき事さはかり
 かしこかりしあまたのさう人とのきこえ
 あつめたるをとし比は世のわつらはしさにみな
 おほしけちつるをたうたいのかくくらゐにかなひ
 給ぬる事を思ひのことうれしとおほす身つ

からはもてはなれ給へるすちはさらにあるまし

き事とおほすあまたのみこたちの中に

すくれてらうたき物におほしたりしかと

たゝ人におほしをきてける御心をおもふに

すくせとをかりけりうちのかくておはします

をあらはに人のしる事ならねとさう人の事

むなしからすと御心の中におほしけり・いまゆ

くすゑのあらまし事をおほすに住吉の神

のしるへまことにかの人もよになへてならぬす

くせにてひかゝしきおやもをよひなき心

をつかふにやありけんさるにてはかしこきす

ちにもなるへき人のあやしきせかいにてむま

れたらんはいとおしうかたしけなくもあるへき

かなこのほとくしてむかへてんとおほしてひ

んかしの院いそきつくらすへきよしおほせ

給さる所にはるゝしき人しもありかたか

7
才

7
ウ

らんをおほしてご院にさふらひしせんしのむす

め宮内卿の宰相にてなくなりし人のこ

なりしをはゝなともうせてかすかなる世に

へけるかはかなきさまにてこうみたりと

きこしめしつけたるをしるたよりありて事

のついでにまねひきこえける人めしてさ

るへきさまにの給ちきるまたわかくなに心もな

き人にてあけくれ人しれぬあはらやに

なかむる心ほそさなればふかうもおもひたと

らすこの御あたりの事をひとへにめてた

うおもひきこえてまいるへきよし申させた

りいとあはれにかつはおほしていたしたて

給ものゝついでにいみしうのひまきれてお

はしまいたりさはきこえなからいかにせまし

とおもひみたれけるをいとかたしけなきに

よろつおもひなくさめてたゝの給はせんまゝ

8
才

8
ウ

にときこゆよろしき田なりければいそかし
たて給てあやしう思ひやりなきやう

なれとおもふさまことなる事にてなんみ
つからもおほえぬすまゐにむすほゝれた

りしためしを思ひよそへてしはしねんし給
へなと事のありやうくはしくかたらひ給ふ・

うへの宮つかへ時くせしかは見給おりもあり
しをいたうおとろへにけり家のさまもいひし

らすあれまとひてさすかにおほきなる所

のこたちなとなまじうとましけにいかてす

くしつらんと見ゆ人 わかやかにおかしければ

御らんしはなたれすとかくたはふれの給

てとり返しつへき心ちこそすれいかにとの

給につけてもけにおなしは御身ちかく

もつかうまつりなれはうき身もなくさみな

ましと見たてまつる

かねてよりへたてぬ中とならはねとわ

9
才

かれはおしき物にそありけるしたひやせま
しとの給へはゝちらひて

うちつけのわかれをおしむかことにて思はんか

たにしたひやはせぬなれてきこゆるをいたしと

おほす・くるまにてそ京のほとは行はなれけ

るいとしたしき人さしそへ給てゆめにももらす

ましうくちかため給てつかはす御はかしさ

るへき物なと所せきまておほしやらぬく

まなしめのとにもありかたうこまやかなる

御いたはりのほとあさからす・入道の思かしつき

おもふらんありさま思ひやるもほゝゑまれ給事

おほく又あはれに心くるしうもたゝこの事の

御心にかゝるもあさからぬにこそは御ふみにも

をろかにもてなしおもふましと返くゝいまし

め給へり

いつしかも袖うちかけんをとめこかよへて

9
ウ10
才

なてんいはのおひさきま津の国までは舟に
てそれよりあなたはむまにていそきつきぬ・入道
まちとりよるこひかしこまりきこゆる事か
きりなしそなたにむきておかみきこえてあり
かたき御心はへをおもふにいよ／＼いたはしうおそ
ろしきまておもふちこのいとゆ／＼しきまて

10
ウ

おもふちこのいとゆ／＼しきまてうつくしうお
はする事たくひなしけにかしこき御心にか
しつきこえんとおほしたるはむへなりけり
と見たてまつるにあやしき道にいてたち

て夢の心ちしつるなけきもさめにけり・い
とうつくしうらうたうおほえてあつかひきこ
こゆこもちの君も月こらものをのみおもひ
しつみていと／＼よはれる心ちにいきたらんと
もおほえさりつるをこの御をきてのすこし
物おもひなくさめらるゝにそかしらもたけ

11
オ

て御つかひにもなく心さしをつくすつくまい
りなむといそきくるしかればおもふ事とも
すこしきこえつゝけて

ひとりしてなつるは袖のほとなきにおほ
ふはかりのかけをしそまつときこえたりあやし
きまて御心にかゝりゆかしうおほさる・女君に
はことにあらはしておさ／＼きこえ給はぬをき
きあはせ給事もこそとおほしてさこそあんな
れあやしうねちけたるわさなりやさもお
はせなと思あたりには心もとなくておも

11
ウ

ひのほかにくちおしくなん女にてあなれはいと
こそ物しけれ尋しらてもありぬへきことな
れとさほえおもひすつましきわさなりけり
よひにやりてみせたてまつらんにくみ給な
よときこえ給へはおもてうちあかみてあやし
うつねにかやうなるすちの給つくる心のほと
こそ我なからうとましけれ物にくみはいつなら

ふへきにかとえむし給へはいとよくうちゑみ
てそよたかならはしにかあらんおもはずに^そ
みえ給ふや人の心よりほかなるおもひやり

12
才

こととしてもの衆^えんしなとし給よおもへはかなし
とてはて／＼はなみたくみ給とし比あかす恋し
とおもひきこえ給し御心の中ともおり／＼の
御ふみのかよひなとおほしいつるにはよろづの
事すさひにこそあれとおもひけたれ給・この
人をかうまで思やり事とふはなをおもふやう
のあるそまたきにきこえは又ひか心え給へ
ければとの給さして人からのおかしかりしも所
からのめつらしうおほえきかしなとかたりきこえ
給あはれなりし夕のけふりいひし事なと

12
ウ

まほならねとその夜のかたちほのみしこと
のねのなまめきたりしもすへて心とまれ
るさまにの給いつるにもわれは又なくこそかな

しと思ひなけしかすさひにても心わけ給
けんよとたゝならす思ひつゝけられて我はわ
れとうちそむきなかめてあはれなりしよのあ
りさまかなとひとりことのやうにうちなかめ
まて

おもふとちなひくかたにはあらずとも我
そ煙にさきたちなましなにとかや心つや

13
才

誰により世をうみ山に行めぐりたえぬ^な
みたにうきしつむ身そいてやいかて見えたて
まつらんのちこそかなひかたかへきものなめれ
はかなき事にて人に心をかれしと思もたゝ
ひとつゆへにやとてさうの御ことひきよせて
かきあはせすさひ給てそゝのかしきこえ給へ
とかのすくれたりけんもねたきにやてもふれ
給はすいとおほとかにうつくしうたをやき
給へる物からさすかにしうねき心つきて物衆^え
しし給へるか中／＼あい行つきてはらち

なし給をおかしう見ところありとおほす・五

13
ウ

月五日そいかにはあたるらんと人しれすかす

へ給ひてゆかしうあはれにおほしやるなに

事もいかにかひあるさまにもてなしうれしから

ましくちおしのわさやさる所にしも心くる

しきさまにていてきたるよとおほすお

とこ君ならましかはかうしも御心にかけ給ま

しきをかたしけなういとおしう我御すくせ

もこの御事につけてそかたほなりけり

とおほさるゝ・御つかひいたしたてらるかならず

14
オ

その日たかへすまかりつけとの給へは五日に

いきつきぬおほしやる事もありかたくめ

てたきさまにてまめ／＼しき御とふらひも

あり

うみ松や時そともなきかけにあてなにの

あやめもいかにわくらん心のあくかるゝまてなん

猶かくてはえすくすましきを思ひたち給ひぬ

さりともつしるめたき事はよもとかい給へり入道

れいのよろこひなきしてゐたりかゝるおり

はいけるかひもつくりいてたることはりなり

と見ゆこゝにもよろづ所せきまておもひ

まうけたりければこの御つかひなくはやみの

よにてこそくれぬへかりけれ・めのともこの

女君のあはれにおもふやうなるをかたら

ひ人にてよのなくさめにしけりおさ／＼おと

らぬ人もるいにふれてむかへとりてあらず

れとこよなくおとろへたる宮つかへ人などの

いはほのなかつぬるかおちとまれるなど

こそあれこれはこよなうこめき思あかれりき

き所ある世の物かたりなとしておとゝの君の

御ありさまよにかしつかれ給へる御おほえ

のほとも女心にまかせてかきりなくかたり

15
オ

14
ウ

つくせはけにかくおほしいつばかりのなごりとゝ
めたる身もいとたけくやうゝ思ひなりけり
御文もろともに見て心のうちにあはれかうこそ
思のほかにてたきすぐせはありけりうき
ものは我身にこそありけれと思ひつゝけらる
れとめのとのことはいかになとこまかにとふらはせ
給へるもかたしけなく何事もなくさめけり御
返しには

かすならぬみしまかくれになくたつをけふも
いかにとゝふ人そなきよろつにおもひ給へむ
すほるゝありさまをかくたまさかの御なくさめ
にかけはへるいのちのほともはかなくなん
けにつしろやすく思給へをくわさまかなとま
めやかにきこえたり・うち返し見給つゝあはれ
となかやかにひとりこち給ふを女君しりめ
に見をこせてうらよりをちにこく舟のと
しのひやかにひとりこちななめ給ふをまこと

15
ウ

はかくまでとりなし給よこはたゝかはかりのあ

はれそや所のさまなとうちおもひやる時ゝ
きしかたの事忘れかたきひとりことをよ
うこそきゝすくい給はねなとうらみきこえ
給てうはつゝみはかりを見せたてまつらせ
給手などのいとゆへつきてやむことなき人
くるしけなるをかゝれはなめりとおほすかく
この御心とり給ほとに花ちる里をかれはて
給ぬるこそいとおしけれおほやけ事ともし
けく所せき御身におほしはゝかるにそへて
もめつらしく御めおとろく事のなきほとお
もひしつめ給なめり・五月雨つれゝなる比お
ほやけわたくし物しつかなるにおほしおこして
わたり給へりよそなからもあけくれにつけて
よろつにおほしやりとふらひ給をたのみて
すくい給ところなれはいまめかしう心にくいさま

16
ウ16
オ

にそはみきこえ給へきならねは心やすけなり
年比にいよ／＼あれまさりすこけにておほす・

女御の君に御ものかたりきこえ給てにしのつ
まとは夜ふかしてたちより給へり月おほ

ろにさし入ていと／＼えんなる御ふるまひつき

もせず見え給いと／＼つ／＼ましかれとはしちかう

うちなかめ給けるさまなからのとやかにても

のし給けはひいとめやすしくみなのいとちかう

鳴たるを

くゐなたにおとろかさすはいかてかはあれたる

宿に月をいれましいとなつかしういひけち給

へるはとり／＼にすてかたきよかな／＼るこそ

中／＼身もくるしかれとおほす

をしなへてた／＼くゐなにおとろかはうは

のそらなる月もこそいれうしろめたうとは猶こ

とにきこえ給へとあた／＼しきすちなとつた

17
才

17
ウ

かはしき御心はへにはあらずとしころまちす

くしきこえ給へるもさらにをろかにはおほされ

さりけりそらななかめそとたのめきこえ給ひ

しおりの事も給いて／＼なとてたくひあら

しといみしうものを思ひしつみけんつき身から

はおなしなけかしさにこそとの給へるもおいらかに

らうたけなりれのいつこの御ことのはにかあら

むつきせずそかたらひなくさめきこえ給・

かやうのついでにもかの五せちをおほしわすれ

す又見てしかなと心にかけ給へれといとかた

き事にてえまきれ給はす女もの思たえ

ぬをおやはよろつに思ひいふ事もあれとよに

へん事を思たえたり・心やすきとのつくり

してはかやうの人つとへてもしおふさまにかし

つき給へき人もいてものし給は／＼さる人のう

しろみにもとおほす・かの院のつくりさま中／＼

見所おほくいまいたりよしあるすらうなと

18
才

をえりてあて／＼にもよほし給ふ・ないしのかんの君なをえおもひはなちきこえ給はすこり

18
ウ

すまにたちかへる御心はへもあれと女はうきにこり給てむかしのやうにもあひしらへきこえ給はす中／＼所せうさう／＼しく世中おほさる・院はのとやかにおほしなりてときときにつけておかしき御あそひなとこのましけにておはします女御かういみなれいのことさふらひ給へと春宮の御はゝ女御のみそとりたてゝときめき給事もなくかんの君の御おほえにをしかたれ給へりしをかくひきたかへめてたき御さいはひにてはなれいてゝ

19
オ

宮にそひたてまつり給へる・このおとゝの御とのゐ所は昔のしけいさなりなしつつに春宮はおはしませはちかとなりの御心よせになに事をもきこえかよひて宮をもうしろ

みたてまつり給・入道きさいの宮御くらゐを又あらため給へきならねは太上天皇になすらへてみふ給はゝり院司ともなりてさまことにいつくしう御おこなひくとの事をつねのいとなみにておはします年ころよにはゝかりて出いりもかたく見たてまつり給はぬ

19
ウ

をいふせくおほしけるにおほすさまにてまゐりまかて給もいとめてたければおほきさいはうき物は世なりけりとおほしなかくおとゝはことにふれていとつかしけにつかまつり心よせきこえ給も中／＼いとをしけなるを人もやすからすきこえけり・兵部卿のみことし比の御心はへのつらくおもはずにてたゝよのきこえをのみおほしはゝかり給し事をおとゝはうき物におほしをきてむかしのやうにもむつひきこえ給はすなへての

20
オ

よにはあまねくめてたき御心なれとこの御
 あたりは中／＼なまけ^さなまけなまけふしもうちま
 せ給を入道の宮はいとおしうほいなきこと
 に見たてまつり給ふ・世中の事たゝなか
 はをわけておほきおとゝこのおとゝの御まゝ
 なり・權中納言の御むすめそのとしの八月に
 まいらせ給おほちおとゝぬたちてきしきなと
 いとあらまほし兵部卿の宮の中の君も
 さやうに心さしてかしつき給なたかきをおとゝ
 は人よりまいり給へとしも・おほさすなんあり
 けるいかゝし給はんとすらむ・その秋すみよしに
 まつて給願ともはたし給へければいかめし
 き御ありきにて世中ゆすりてかந்தちめ
 殿上人われも／＼とつかうまつりたまふお
 りしもかのかしの人年ことのれいの事にて
 まつるをことしさはる事ありておこたり
 けるかしこまりとりかさねておもひたち

20
ウ

けり舟にてまつてたりきしにさしつくる
 ほと見な^れはのゝしりてまつて給ふ人のけは
 ひなきさにみちていつくしきかんだからをも
 てつゝけたりかく人とをつらなとしやちそく
 をとゝのへかたちをえらひたりたかまつて
 給へるそとゝふめれは内大臣との御願はたし
 にまつて給をしらぬ人もありけりとはか
 なきほとけすたに心ちよけにうちわら
 ふけにあさましう月日もこそあれ中／＼こ
 の御ありさまをはるかにみるに身のほとくち
 おしうおほゆさすかにかけはなれたてまつら
 ぬすくせなからかくくちおしききはものたに
 物思ひなけにてつかうまつるを色ふしに
 思ひたるになにのつみふかき身にて心そか
 けておほづかなう思きこえつゝかゝりける
 御ひゝきをもしらてたち出つらんなと

21
オ21
ウ

思つゝくるにいとかなしうて人しれずしほ
たれけり・松原のふかみとりなる中に花紅
葉をこきちらしたると見ゆるうへのきぬの
こきうすきかすしらす六位の中にもくら人
はあをいろしるく見えてかの賀茂のみつか
きうらみし右近のせうもゆけいになりて
ことゝしけなるすいしんくしたる蔵人なり

22
才

よしきよもおなしすけにて人よりことに物
おもひなきけしきにておとろゝしきあか
きぬすかたいときよけなりすへてみし人々
ひきかへはなやかに事に事おもふらんと見え
てうちちりたるにわかやかなるかんたちめ
殿上人のわれもゝと思ひいとみ馬くらなど
まてかさりとゝのへみかき給へるはいみしき
みものにゐる中人もおもへり御車をはる
かに見やれば中ゝ心やましくて恋しき御
おもかけをもえ見たてまつらすかはらのおとゝ

22
ウ

の御れいをまねひてわらはすいしんを給
はりたまひけいとおかしけにさうそき
みつらゆひてむらさきすそのもとゆひ
なまめかしうたけすかたとゝのひうつくしけ
にて十人さまことにいまめかしうみゆおほ
とのはらのわか君かきりなくかしつきたてゝ
馬そひわらはのほとみなつくりあはせて
やうをかへてさうそき分たり雲ぬはる
かにめてたく見ゆるにつけてもわか君
のかすならぬさまにてもものし給をいみしと思

23
才

いよゝみやしろのかたをおかみきこゆくに
のかみまいりて御まつけいの大臣など
のまいり給よりはことになくつかうま
つれりけんかしいとはしたなければたちま
しりかすならぬ身のいさゝかの事せんに神
も見いれかすまへ給へきにあらすかへらんにも

なかそらなりけふはなにはに舟さしとめて
はらへをたにせんとてこきわたりぬ君は夢
にもしり給はすよひとよ色くの事をせ
させ給まことに神のよろこひ給へき事をし

つくしてきしかたの御願もうちそへあり
かたきまであそひのしりあかし給これみ
つやうの人は心のうちに神の御とくをあ
はれにめてたしと思あからさまにまちいて
給へきにさふらひてきこえいてたり

すみよしのまつこそ物はかなしけれ神よの事
をかけておもへはけにとおほしいてゝ

あらかりし浪のまよひに住よしの神をは
かけてわすれやはするしありなとの給
もいと たしかのあかしの舟このひききにを

されて過ぬる事もきこゆれはしらさりける
よとあはれにおほす神の御しるへおほしい

23
ウ24
オ

つるもをろかならねはいさゝかなるせうそこ
をたにして心なくさめはや中くにおもふら
むかしとおほすやしるたち給てところく
にせうえうをつくし給なにはの御はらへなと
ことによそをしうつかまつるほりえのわた
りを御らんしていまはたおなしにはなると
御心にもあらてうちすんし給へるを御車
のもとちかきこれみつつ給やしつらんさる

めしもやとれいにならひてふところになつた
るつかみしかきふてなと御車とむる所に
てたてまつれりおかしとおほしてたう
かみに

みをつくしこふるしにこゝまでもめく
りあひけるえにはふしなとて給われはかし
この心しれるしも入してやりけりこまなへ
てうちすぎ給にも心のみつこくに露はかり
なれていとあはれにかたしけなくおほえて

24
ウ

うちなきぬ

かすならてなにはの事もかひなきになと

みをつくしおもひそめけんたみのゝ島にみ
そきつかうまつるはらへのものにつけてた
てまつる日くれかたになり行タしほみちき
て入江のたつもこゑおしまぬほとのはれ
なるおりからなれはにや人めもつゝますあ
ひ見まほしくさへおほさる

露けさのむかしにゝたるたひ衣たみののし

まの名にはかくれすみちのまゝにかひあ
るせうえうあそひのゝしり給へと御心に

は猶かゝりておほしやるあそひとものつ

とひまいれるも上達部ときこゆれとわ

かやかにことこのましかなるはみなめとゝめ

給へるめりされといてやおかしきことも

物のあはれも人からこそあへけれなめ

25
才

25
ウ

なる事をたにすこしあはきかたによりぬる

は心とゝむるたよりもなきものをとおほ

すにをのか心をやりてよしめきあへるも

うとまじうおほしけり・かの人はずくしき

こえてまたの日そよろしかりければみて

くらたてまつりほとにつけたる願とも

なとかつゝはたしける又なかゝものおもひ

そはりてあけ暮くちおしき身を思ひな

けくいまや京におはしつくらんとおもふ日

かすもへす御つかひありこのころのほど

にむかへむ事をその給へるいとたのもしけ

にかすまへの給めれといさや又しまこき

はなれ中空に心ほそき事やあらんと思ひ

わつらふ入道もさていたしはなたむはいと

うしろめたうさりとてかくうつもれてすく

さんをおもはんも中ゝきしかたのとし比

26
才

26
ウ

よりも心つくしなりよろづにつゝましう
 おもひたちかたき事をきこゆ・まことやか
 の齋宮もかはり給にしかはみやすん所の
 ほり給てのちかはらぬさまに何事もとふ
 らひきこえ給ことはありかたきまでなきけ
 をつくし給へとむかしたにつれなかりし御心
 はへの中／＼ならんなこりはいみしと思はな
 ち給へればわたり給なとする事はことになし
 あなちにつこかしきこえ給ても我心ながら
 しりかたくとかくかゝつらはん御ありきなとも
 所せうおほしなりにたればしゐたるさ
 まにもおはせず齋宮をそいかにねひなり
 給ぬらんとゆかしう思きこえ給・なをかの六条
 のふる宮をいとよくすりしつくるひたり
 ければみやひかにてすみ給けりよしつき
 給へる事ふりかたくてよき女はうなとおほ
 くすいたる人のつとひ所にてものさひし

27
才

きやうなれと心やれるさまにてへ給ほと
 にはかにおもくわつらひ給てものゝいと
 心ほそくおほされければつみふかき所にと
 し比へつるもいみしうおほしてあまになり
 給ぬおとゝきゝ給てかけ／＼しきすちには
 あらねとなをさるかたのものをもきこえ
 あはせ人におもひきこえつるをかくおほ
 しなりにけるかくちおしうおほえ給へはあ
 ころきながらわたり給へりあかすあはれ
 なる御とふらひきこえ給ちかき御まくらかみ
 におましよそひてけうそくにをしかゝ
 りて御返なときこえ給いたうよりはり給
 へるけはひなれはたえぬ心さしのほとはえ
 みえたてまつらてやとくちおしうてい
 みしうない給かくまでもおほしとゝめたり
 けるを女もよろづにあはれにおほえて齋

27
ウ28
才

宮の御事をそきこえ給・心ほそくてま
り給はんをかならずことにふれてかすまへ
きこえ給へ又みゆつる人もなくたくひなき
御ありさまになんかひなき身からも今し
はし世中を思ひのとむる程はとさまかうさ
まにものをおほしたるまでみたてまつらん

28
ウ

とこそ思給へつれとてもきえ入つゝなき
給かゝる御事なくてたに思はなちきこ
えさすへきにもあらぬをまして心のをよ
はんにしたかひてはなに事もうしろみきこ
えんとなむおもひ給ふるさらにうしろめ
たくな思きこえ給そなときこえ給へ
は・いとがたき事まことにうちたのむへき
おやなどにてみゆつる人たに女おやに
はなれぬるはいとあはれる事にこそ侍め
れましておもほし人めかさんにつけても

29
オ

あちきなきかたやうちましり人に心も
をかれ給はんうたてある思やり事なれ
とかけてさやうのよついたるすちにおほしよ
るなうき身をつみ侍るにも女は思のほか
にて物おもひをそふる物になん侍ければいか
てさるかたをもてはなれてみたてまつらん

と思給ふるなときこえ給へは・あひなくもの
給かなとおほせととしころよろづ思ふ給へし
りにたるものをむかしのすき心のなこり
ありかほにの給ひなすもほいなくなんよし

29
ウ

をのつからとてとはくそつなりうちはおほ
とのあふらほのかに物よりとをりてみゆる
をもしもやとおほえてやをらみき丁の
ほころひより見給へは心もとなきほと
のほかけに御くしいとおかしに花やかに
そきてよりあ給へる衆にかきたらんさ
ましていみしうあはれなり丁のひんかしお

もてにそひふし給へるそ宮ならんかしき
 丁のしとけなくひきやられたるより御めと
 とめて見とをし給へればつら杖つきてい

と物かなしとおほいたるさまなりはつかなれ
 といとうつくしけならんと思ゆ御くしのかゝり
 たるほとかしらつきけはひあてにけた

かき物からひそひかにあいきやうつき給へる
 けはひしるく見え給へは心もとなくゆかしき
 にもさはかりの給物をとおほし返す・いと
 くるしさまさり侍かたしけなきをはやわた
 らせ給ぬとて人にかきふせられ給・ちかくま
 いりきたるしるしによろしうおほされはつれし
 かるへきを心くるしきわさかないかにおほさるゝ

そとてのそき給けしきなれはいとおそろし
 けに侍りやみたり心ちのいとかく限なる
 おりしもわたらせ給へる ことにあさからす

30
ウ30
オ

なん思侍事をすこしもきこえさせつればさ
 りともたのもしくなるときこえさせ給・かゝ
 る御ゆいこんのつらにおほしけるもいとゝあ
 はれになんこ院のみこたちあまたものし
 給へとしたしくむつひおほすもおさゝ
 なきをつへのおなしみこたちのうちにかす
 へきこえ給ひしかはさこそはたのみきこえ侍ら

めすこしおとなしきほどになりぬるよはひ
 なからあつかふ人もなければさうゝしきを
 なときこえてかへり給ぬ御とふらひ今すこ
 したちまさりてしはゝきこえ給・七八日あ
 りてうせ給にけりあえなうおほさるゝに
 よもいとはかなくてもの心ほそつおほされて
 内へもまいり給はすとかくの御事なとをき
 てさせ給又まのもしき人もことにおはせさり
 けりふるき齋宮のみやつかさなとつかうま
 つりなれたるそわつかにこゝもさためけ

31
オ

る・御みつからもわたりたまへり宮に御
せうそくきこえ給何事もおほえ侍らてな
むと女別当してきこえ給へりきこえ

させの給をきし事もはへしをいまはへた
てなきさまにおほされはうれしくなときこ
え給て人くめしいてゝあるへき事とも
おほせ給ふいとたのもしけに年ころの御
心はへとり返しつへうみゆいといかめしう
とのゝ人くかすもなぶつかうまつらせ給へり・
あはれにうちながめつゝ御さうしにてみす

おろしこめておこなはせ給宮にはつねに
とぶらひきこえ給やうく御心しつまり給
てはみつからも御かへりなときこえ給つゝ
ましうおほしたれと御めのとなとかたし
けなしとそゝのかしきこゆるなりけり・雪み
それかきたれあるゝ日いかに宮のありさ

31
ウ32
オ

まかすかになかめ給らんとおもひやりきこ
え給て御つかひたてまつれ給へりたゝ
いまの空をいかに御らんすらむ

ふりみたれひまなき空になき人のあ

まかけるらんやとそかなしき空色のかみ
のくもらはしきにかい給へりわかき人の御め
にとまるはかりと心してつくるひたまへ
るいとめもあやなり宮はいときこえに
くゝし給へとこれかれ人つてにはいとひん
なき事とせめきこゆれはにひ色のかみ
のいとかうはしうえんなるにすみつき
なとまきはして

きえかてにふるそかなしきかきくらし
わか身それともおもほえぬ世につゝましけな
るかきさまにていとおほとかに御手すく
れてはあらねとらうたけにあてはかな

32
ウ33
オ

るすちにみゆ・くたり給ひくほとより猶
あらずおほしたりしをいまは心にかけて
ともかくもきこえよりぬへきそかしとおほ
すにはれのひき返しとをしこそこの
みやす所のいとうしろめたけに心をき
給しをことはりなれと世中の人もさやうに
おもひよりぬへき事なるをひきたかへ心き
よくてあつかひきこえむつへのいますこし

物おほししるよはひにならせ給なは内すみ
せさせたてまつりてさうくしきにかし
つきくさにこそとおほしなる・いとまめやかに
ねんころにきこえ給てさるへきおりくは
わたりなとし給かたしけなくなともむかし
の御なこりにおほしなすらへてけとをか
らすもてなさせ給はくなんほいなる心
ちすへきなときこえ給へとわりなくもの
はちをし給ふおくまりたる人さまにて

33
ウ

ほのかにも御こゑなときかせたてまつらんは
いとよになくめつらかなる事とおほしたれ
は人くもきこえわつらひてかゝる御心さ
まをうれへきこえあへり女へたう内待な
といふ人くあるははなれたてまつらぬわ
かんとをりなにて心はせある人くおほ
かるへしこの人しれす思かたのましらひ
をせさせたてまつらん人にとおり給
ましかめりいかてさやかに御かたちを見て
しかなとおほすもうちとくへき御おや心
にはあらずやありけん我御心もさためかた
ければかく思といふ事も人にもらし給は
す・御わさなどの御事もとりわきせさせ
給へはありかたき御心を宮人もよろ
こひあへり・はかなく過る月日にそへいと
さひしく心ほそき事のみまさるにさぶらつ

34
ウ34
オ

人々もやう／＼あかれゆきなとしてしもつ
かたの京こくわたりなれば人けとをく山
寺の入相の声／＼にそへてもねなきかち
にてそすくし給ふ・おなしき御おやとき
こえし中にもかたとときのまもたちばなれ

たてまつり給はてならはしたてまつ

り給て齋宮にもおやそひてくたり給事

はれいなき事なるをあなかちにいさなひき

こえ給し御心にかきりある道にてはた

くひきこえ給はすなりにしをひるまなうお

ほしなけきたり・さふらふ人々にたかきいやし

きもあまたありされとおと／＼の御めのとた

ちに心にまかせたることひきいたしつかうま

つるな／＼とおやかに申給へはいとはつかしき御

ありさまにひんなき事きこしめしつけ

られしといひ思つ／＼はかなきことのなさけも

35
才35
ウ

さらにつくらす・院にもかのくたり給し日大
こく殿のいつかしかりしきにゆ／＼しき
まてみえ給し御かたちをわすれかたうおほ
しをきければまいり給て齋院なと御はら
からの宮／＼おはしますたくひにてさふら
ひ給へとみやす所にもきこえ給きされ
とやむことなき人々さふらひ給にかす／＼な
る御つしるみもなくてやとおほしつ／＼みてう
へはいとあつしうおはしますもおそろしう

又物思やくはへ給はんとは／＼かりてすくし給し
を今はまして誰かはつかうまつらんと人々おも
ひたゆるをねんころに院にはおほしの給
はせけり・おと／＼き／＼給て院より御けしき
あらむをひきたかへよこり給はんをかた
しけなき事とおほすに人の御あきさま
のいとらうたけに見はなたんはまたくち
おしうて入道のみやにそきこえ給ける・かう

36
才

かうの事をなんおもふ給へわつらふには
宮す所いとおもくしく心ふかきさまに

物し侍しをあちなきすき心にまかせて
さるましきなをもなかしつき物におもひ
をかれ侍にしをなんよにいとをしく思ふ
るこの世にてそのうらみの心とけすき
侍にしをいまはとなりてのきはにこの斎
宮の御事をなむ物せられしかはさもき
をき心にものこすましうこそはさすかに
みをき給けめと思ふ給ふるにもしのひ
かたうおほかたのよにつけてたに心くる
しき事はみきすくされぬわさに侍を

36
ウ37
オ

いかてなきかけ にもかのうらみわするはかり
と思給ふるを内にもさこそおとなひさせ
給ひたれはいとけなき御よはひにおはします
をすこしものゝ心しれる人はさふらはれても

よくやとおもひ給ふるを御さためになんと
きこえ給へは・いとうおほしよりける
を院にもおほさん事はけにかたしけな
ういとをしかるへけれとかの御ゆい言をか
こちてしらすかほにまいらせたてまつり
給へかし今はたさやうの事わざとおほし

とゝめす御をこなひかちになり給てかう
きこえ給をふかうしもおほしとめしかしと
思ひ給ふるさらは御けしきありてかす
まへさせ給はゝもよほしはかりの事をそふ
るになし侍らむ・とさまかうさまに思ふ給へ
のこすことなきにかくまでさはかりの心かまへ
もまねひ侍るに世人やいかにとこそはゝ
かり侍るになときこえ給ひてのちには
けにしらぬやうにてこゝにわたしたてま
つりてんとおほす女君にもしかかなおもふ

37
ウ38
オ

かたらひきこえてすくい給はんにいとよき
 ほとなるあはひならんときこえしらせ給へはう
 れしき事におほして御わたりの事をいそ
 き給ふ・入道の宮には兵部卿の宮のひめ
 君をいつしかとかしつきさはき給めるを
 おとゝのひまある中にていかゝもてなし
 給はんと心くるしうおほす・権中納言の御
 むすめはこき殿の女御ときこゆおほとゝ
 御こにていとよそをしうもてかしつき給
 うへもよき御あそひかたきにおほいたり宮

の中の君もおなしほとおはすれはうた
 てひぬなあそひの心ちすへきをおとなし
 き御うしろみはいとうれしかへい事とおほし
 の給てさる御けしきゝこえ給つゝおとゝの
 よろつにおほしいたらぬ事なくおほやけ
 かたの御うしろみはさらにもいはすあけくれ
 につけてこまかなる御心はえのいとあはれ

にみえ給をたのもしき物に思ひきこえ
 給ていとあつしくのみおはしませはまいり
 なとし給ても心やすくさふらひ給ふ事も
 かたきをすこしおとなひてそひたまはん
 御うしろみはかならすあるへきことなりけり

注

- (1) 「長谷川端蔵『源氏物語』 源氏物語筆者目録 源氏物語秘訣」『文学部紀要』第四七卷二号（中京大学文学部 平成二五年三月）
- (2) 注1の『源氏物語筆者目録』では、「大鳥井」と「居」ではなく「井」とする。
- (3) 「長谷川端蔵『源氏物語』 昌琢筆 桐壺」『文学部紀要』第四八卷一号（中京大学文学部 平成二五年十月）
- (4) 「長谷川端蔵『源氏物語』 玄陳筆 帚木」『文学部紀要』第四八卷二号（中京大学文学部 平成二六年三月）
- (5) 「長谷川端蔵『源氏物語』 玄的筆 空蟬 岡本主水筆 夕顔」『文学部紀要』第四九卷一号（中京大学文学部 平成二六年十月）
- (6) 注5に同じ。
- (7) 「長谷川端蔵『源氏物語』 岡本主水筆 若紫 石井了俱筆 末摘花 左馬助筆 花宴」『文学部紀要』第四九卷二号（中京大学文学部 平成二七年三月）
- (8) 「長谷川端蔵『源氏物語』 東寺觀智院筆 葵 岡本主水筆 賢木 北左平次行生筆 花散里」『文学部紀要』第五〇卷一号（中京大学文学部 平成二七年十月）
- (9) 注7に同じ。
- (10) 「長谷川端蔵『源氏物語』 西山宗因筆 紅葉賀」『文学部紀要』第四六卷二号（中京大学文学部 平成二四年三月）
- (11) 「長谷川端蔵『源氏物語』 西山宗因筆 宿木」『文学部紀要』第四七卷一号（中京大学文学部 平成二四年十月）
- (12) 注7に同じ。
- (13) 注8に同じ。
- (14) 注8に同じ。
- (15) 益軒会編『益軒全集』卷五『太宰府天満宮故実』（国書刊行会 昭和四八年五月）

- (16) 益軒会編『益軒全集』巻四『筑前国続風土記』(国書刊行会 昭和四八年五月)「御笠郡 中 天満宮」には、

此御社の祭礼、はじめは太宰帥となる人司どれり。其後菅原氏勅をうけて、かはるゝ御社の別当となり、六年を以て任として祭礼をつとむ。後堀川院御時、菅公九世の孫菅原善昇と云し人、おほやけのみことのりにて西府に下り、社職をつとめ、祭礼を司どれり。後に祝髪して信貞と号す。其嫡子を信昇といふ。是より大鳥居小鳥居などの家わかれて、其子孫相続で、今に至りて社務職たり。今の社は、大鳥居、小鳥居、御供屋、執行坊、浦の坊、此五家はとも菅姓にて、別当職と称す。中に就て、大鳥居はいにしへより別当留守職として、今も其巨擘たり。小鳥居もそのかみ相並んで神事を執行ひ、かはるがはる別当留守職をつとめしとかや。

大鳥居の向に宅ある故、其家は大鳥居と云、小鳥居の方に宅ある故、其家の名を小鳥居といふ。

という記載がある。

- (17) 川添昭二氏他編著『太宰府天満宮連歌史 資料と研究』(財団法人太宰府顕彰会 昭和五五年三月) 棚町知彌氏「近世宰府連歌壇史藁草上」に翻刻がある。

- (18) 注16の『筑前国続風土記』の中に、

筑後国下妻郡水田邑千石の地を、將軍家より寄附しまいらせらる。其実は其半にも不足といへり。大鳥居是を領す。又久留米の城主有馬氏より、水田の内にて二百五十石、元和八年より寄附せらる。柳川の城主立花飛驒守親成なりの事よりも五十石寄附有て、今にしかり。

という記載もある。棚町知彌氏「黒田如水の連歌」『近世文芸資料と考証』Ⅴ(七人社 昭和四一年二月)も参考。

- (19) 棚町知彌氏「大鳥居信岩伝・信助伝稿 附上座坊実右について 太宰府天満宮連歌史・その五」(『有明工業高等専門学校紀要』三 昭和四二年二月)

- (20) 注19に同じ。

- (21) 注17に同じ。

- (22) 注18「黒田如水の連歌」、注19の論文、棚町知彌氏「福城松連歌 近世太宰府天満宮連歌史・序説」『近世文芸資料と

考証³⁵ (七人社 昭和四〇年二月)

(23) 注22 「福城松連歌 近世太宰府天満宮連歌史・序説」の中に翻刻がある。

(24) 注18 「黒田如水の連歌」

(25) 注18 「黒田如水の連歌」の巻末「註一四」に「昌林と推定」とある。

(26) 奥付に「元禄十四辛巳年二月吉辰」とある。

(27) 金子金治郎氏『菟玖波集の研究』(風間書房 昭和四〇年二月)「北野信仰と集の成立」

(28) 伊地知鐵男氏『伊地知鐵男著作集』「連歌・連歌史」(汲古書院 平成八年一月)「北野信仰と連歌」

(29) 島津忠夫氏『島津忠夫著作集』第六巻「天満宮連歌史 付 法楽連歌ほか」(和泉書院 平成一七年一月)「大阪天満宮と連歌 西山宗因の宗匠就任まで」

(30) 金子金治郎氏『新撰菟玖波集の研究』(風間書房 昭和四四年四月)「九州における文学活動」

(31) 注29と同書「太宰府天満宮連歌史」

(32) 注19の「史料²⁴」に翻刻がある。

(33) 連歌総目録編纂会編『連歌総目録』(明治書院 平成九年四月)

(34) 川添昭二氏他編著『太宰府天満宮連歌史 資料と研究』(財団法人太宰府顕彰会 昭和五六年三月)

川添昭二氏他編著『太宰府天満宮連歌史 資料と研究』(財団法人太宰府顕彰会 昭和六一年三月)

川添昭二氏他編著『太宰府天満宮連歌史 資料と研究』(財団法人太宰府顕彰会 昭和六二年三月)

大宰府天満宮文化研究所編『菅原道真と太宰府天満宮』下巻(昭和五十年三月 吉川弘文館) 棚町知彌氏「寛永期黒田

忠之をめぐる連歌壇と宰府・ノート」も参考。

(35) 注19に同じ。

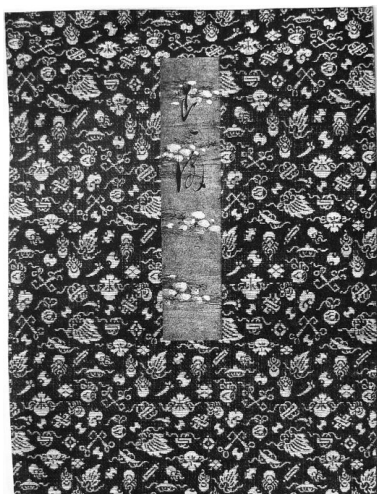
(36) 注10に同じ。

- (37) 信助が連衆となっている、元和八年（一六二二）三月十九日「何船」の連歌会を例として掲げる。
発句 花になして春は色ある心かな
昌琢十三・禅高十一・禅昌八・昌倪九・玄陳九・玄的八・慶純八・信助五・宗順十・了俱八・行生五・仙閑一・無記四
- (38) 「玄仍筆『源氏物語註』上冊」「文学部紀要 第四四卷二号（中京大学文学部 平成二三年三月）
(39) 注5に同じ。
(40) 注7に同じ。
- (41) 益軒会編『益軒全集』巻五『黒田家譜』（国書刊行会 昭和四八年五月）。注34の『太宰府天満宮連歌史資料と研究』
棚町知彌氏「近世宰府連歌壇史藁草・続（下）」にも短冊の翻刻がある。
- (42) 安藤英男氏編『黒田官兵衛のすべて』（中経出版 平成二五年九月）諏訪勝則氏「文化人としての官兵衛」、諏訪勝則氏
『黒田官兵衛「天下を狙った軍師」の実像』（中公新書 平成二五年一月）第五章「天下統一から海外遠征へ」に、如
水の連歌に関する年表がある。
- (43) 注42と同書、小和田哲男氏『黒田官兵衛 智謀の戦国軍師』（平凡社新書 平成二五年一月）等を参考。
- (44) 小和田哲男氏監修『黒田官兵衛』（宮常出版社 平成二六年二月）松岡博和氏「黒田官兵衛の茶の湯」、注42・43と同書
等を参考。
- (45) 如水の文学活動については、中村幸彦氏『中村幸彦著述集 第二二巻（中央公論社 昭和五八年二月）』『細川幽斎の文
学生活』、吉永正春氏『太宰府戦国史』（太宰府天満宮 昭和六三年二月）『如水と天満宮』、注42と同書、注44と同書の
綿坂豊昭氏「黒田官兵衛の連歌」、同氏『戦国武将と連歌師 乱世のインテリジェンス』（平凡社新書 平成二六年一月）
第七章「軍師の連歌」等を参考。
- (46) 注41に同じ。
- (47) 注16に同じ。注41の『黒田家譜』の巻一四には、

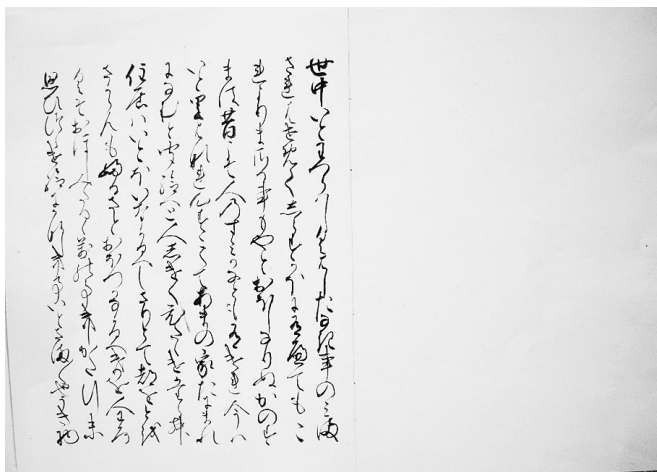
如水は福岡の城いまだ成就せざりし間、博多より太宰府に移り、鳥居の東にいさゝかなる宅を新にいとみて住給ふ。其後一兩年過て、福岡の城成就せし時、城内の西北三の九の小高き岡に宅をかまへて居住したまふ。宰府の故宅は、社僧大鳥居に与へらる。

とある。

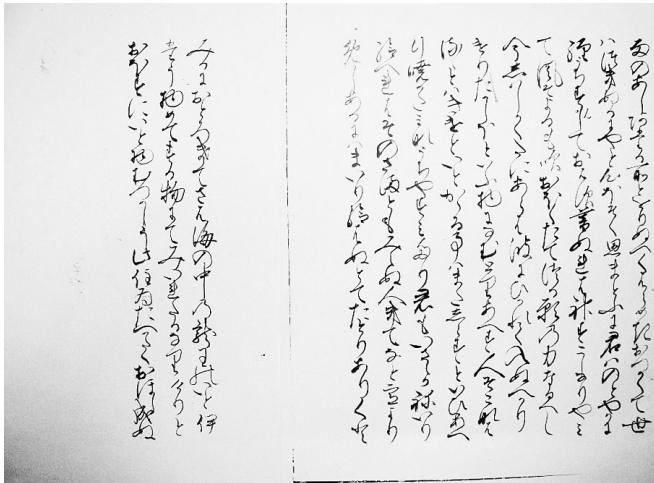
- (48) 注22 「福城松連歌 近世太宰府天満宮連歌史・序説」
- (49) 注18 「黒田如水の連歌」
- (50) 注42 と同書 「関ヶ原合戦と官兵衛の晩年」
- (51) 朱合点とは異なる合点あり。
- (52) 注51に同じ。
- (53) 注51に同じ。
- (54) 注51に同じ。
- (55) 注51に同じ。



須磨 表紙



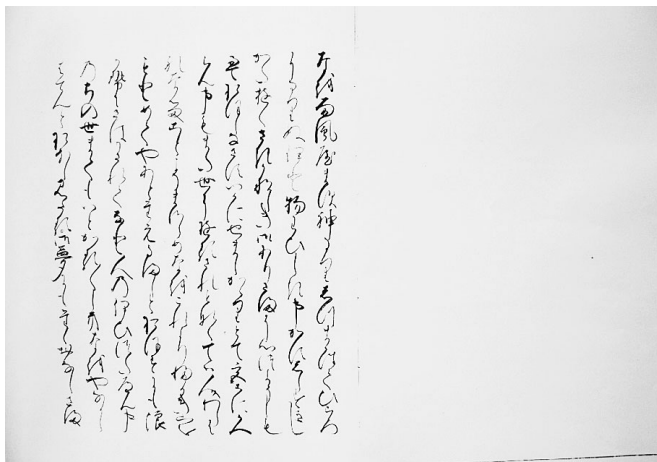
須磨 1才



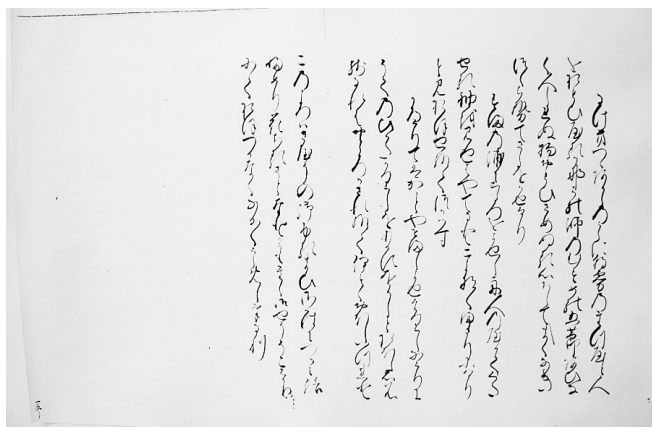
須磨終丁



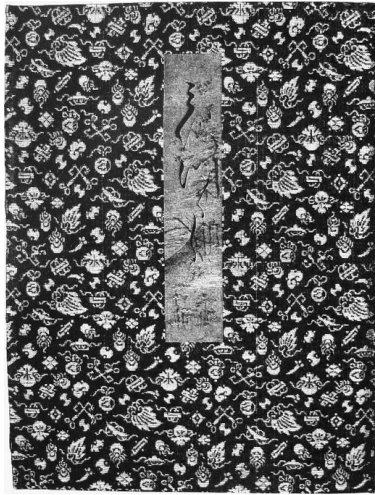
明石 表紙



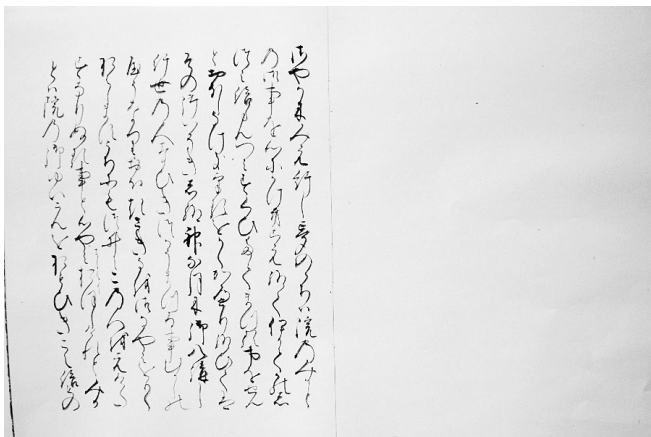
明石 1才



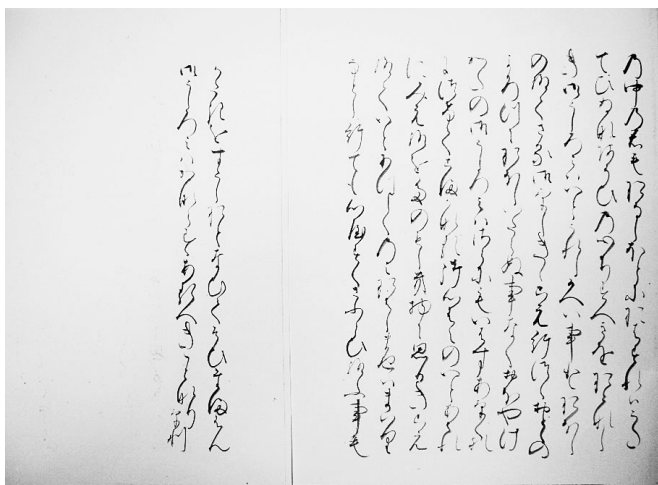
明石 終丁



薄標 表紙



薄標 1才



薄標 終丁